

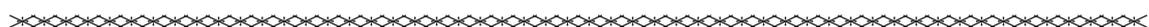
歯学部ニュース

令和7年度第2号 (通算148号)

特集 歯学部卒業おめでとう
歯学部生の活動
留学に行こう

目次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 井上 誠	
副病院長から 多部田康一	
卒業生のことば 永澤 芽衣・米山明由莉・小田切美築・山本 花恋・川野 太朗	
大学院修了にあたり	8
永島 和裕・齋藤 瑠郁・中村 夢衣	
臨床研修修了にあたり	11
石塚 公都・小杉 沙綺・野村 陽菜	
特集2 歯学部生の活動	14
SSSV・SCRIP・国際学会参加の報告	
石田 陽子・穴戸 香・小泉 文哉・白髭 美帆・高桑 滯・鈴木 綾乃	
歯学部生の今	
松本 七香・須藤 泰斗・雨海 祐花・石川 凌久・神向寺 咲・末永 蒼空・黒米 船斗・山田 佳奈 溝口宗一郎・相原 礼奈・牛戸 風歌・田中 奏早・青木 結衣・伊藤 彩乃・田邊 史歩・高橋 美桜	
特集3 留学に行こう	36
阿部 達也	
総務委員会だより	37
井上 誠	
教授に就任して	41
小野 重弘	
部活動紹介	43
歯学部硬式庭球部 吉田 成穂・歯学部サッカー部 藤川 悌也	
早期臨床実習を終えて	45
河合 美奈・会田 優仁・多賀谷歩楓・月精 実来・鎌田 星歌・五味洸晃成	
ポリクリを終えて	49
吉田 貴大・内澤 星七・大沼 柊太	
名誉博士号を拝領して	51
Roxana STEGAROIU	
学会受賞報告	52
齋藤 瑠郁・大倉 直人・長澤 伶・相澤 有香・Prasiddha Mahardhika El Fadhlallah 大川加奈子・筒井 雄平・相澤 知里・星野 剛志・Olenka Yomira VALENZUELA TORRES 室橋 波菜・松本明日香	
素顔拝見	64
竹内 涼子・五月女哲也・筒井 雄平・田村 光	
留学生紹介	68
Ho Yin LEUNG	
退職によせて	69
小野 和宏・葭原 明弘・神子島句子・金谷 貢	
技工部だより	74
長谷川健二	
新潟歯学会報告	75
竹原 祥子	
同窓会だより	77
加藤 幸生	
ミニコラム	78
歯学部を支える方々 南 愛奈・齋藤 史人	
教職員異動	80
編集後記	81



特集 1

歯学部卒業おめでとう



Bon Voyage !

新潟大学歯学部長 井上 誠

歯学科第56期生、口腔生命福祉学科第19期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。この度めでたくご卒業される皆さんへ、全教職員を代表して心からお祝い申し上げます。また保護者をはじめご家族の皆様方におかれましても、卒業の日を迎えられましたこと心よりお祝い申し上げます。

新潟大学歯学部では現在までに3,000名を超える卒業生を輩出し、歯科医療、介護・福祉、歯科医学の教育、研究、社会貢献という見地から全国に誇る「知の拠点」としての役割を果たし続けて2025年には創立60周年を迎えました。11月1日には記念事業を実施して学内外から多くのお祝いメッセージをいただくとともに、日本歯科医師会長、新潟県歯科医師会長、新潟大学長、新潟大学歯学部同窓会長などから、これからの歯科医療や福祉分野が抱える課題に新潟大学歯学部がどう応えるかを考える機会をいただきました。今年度ご卒業される皆さんが、歯科や福祉分野を含む2026年以降の社会課題をどのように克服していくか、共に考える一員となる日を迎えられたことを本当にうれしく思います。

今後の歯科界において避けては通れない課題のひとつはデジタルテクノロジーのさらなる普及・拡大です。近年のCBCT、CAD/CAMシステム、口腔内スキャナの導入や保険収載など、今や当たり前になっている歯科医療技術に加えて、今後はAIの歯科医療への活用、遠隔医療の導入などが期待されています。ことにAIの導入は、すでに医科では診断、治療計画、患者管理の分野で顕著な発

展を遂げています。AIが早期の画像診断を支援し、初期う蝕や歯周疾患などを発見することが可能になれば、これまでの歯科医療のあり方は革命的に変わる可能性があります。また遠隔医療に関して、新潟大学では地域医療DX共創IPというプロジェクトが立ち上げられて、高齢化、人口減少、医師不足・偏在、医療アクセス不均衡などの地域医療課題の解決に取り組むべく、県内の公立病院と医療連携会議を組織して統合的戦略を検討しています。その中核をなすのがオンラインを活用した外来機能強化や地域医療関係者間のコミュニケーションツール導入です。歯学部でも一昨年から地域医療DX共創IPに参加して、地域歯科医療をオンラインで支える仕組み作りを模索しています。IT技術をどのように実装化できるか、地域医療をどのように支えていくかを考える上では、皆さんへの期待がとても高いことをぜひ覚えておいてください。

COVID-19パンデミックを経て、社会は長年にわたる慣行・慣習が崩されるとともに、デジタル化・リモート化へのシフト、人員削減や効率化といった流れが急速に進んでおり、時には何を頼りに人生設計を立てていくべきか悩むこともあるかも知れません。しかし私たち教職員は、皆さんには新しいフェーズを迎えた社会で活躍するために必要な知識、技能、態度が十分に培われたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという高い誇りを胸に、大いに活躍してください。

Bon voyage !



卒業を祝して

医歯学総合病院副院長（歯科総括） 多部田 康 一

歯学科56期生・口腔生命福祉学科19期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。努力の末、新潟大学歯学部教育課程を修了し、学士の学位を取得された皆さんとそれを支えてこられたご家族、ご親族の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

皆さんは歯学部への入学前後に、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという特異な時代を経験した世代です。感染症による日常生活の変化や価値観の多様化、そこに生じる精神的なストレスも経験しました。この厳しい環境下で学び成長した皆さんは、これから歯科医療や社会福祉の分野で活躍するために必要な、社会的視野を備えた世代といえるでしょう。これまで皆さんは、歯学部において歯科医学、口腔保健医療・福祉学の重要な知識と基本技能を習得し、不変の土台を築くための学びを重ねてきました。これからは現場での経験を通じて、成熟したプロフェッショナルへと成長してゆく必要があります。是非ともその挑戦の過程を楽しみ、自己の研鑽を継続してください。

今後10年、20年後の社会は確実に変化します。少子高齢化の進行、疾病構造と医療ニーズの変化、さらにはグローバル化や多文化対応の必要性を含めて歯科医療の需要の形態は変わるでしょ

う。加えて、社会情勢の不確実性や物価・雇用環境の変動により、医療・福祉を取り巻く前提が揺れ動く局面も増えています。医療・福祉は、限られた資源の中で質と安全を守りつつ、効率性も求められる時代に入りました。DXやAIは効率化の手段になり得ますが、それだけで課題が解決するわけではありません。最終的に価値を生むのは、人の痛みや不安に向き合い、信頼を積み重ねる専門職業人の力です。変化を味方につけつつ、本質を外さない姿勢を貫き、柔軟性と適応力をもって活躍してください。同時に、社会のため、患者さんのために働く奉仕の精神が大切であり、医療職に携わる皆さんの誇りを高め、仕事のやりがいを生み、皆さんの人生をより豊かにするものと信じます。

本学歯学部の卒業生の皆さんには、各々の分野で専門職業人としての尽力によって社会を支えるとともに、臨床・現場での実践、あるいは研究を通して、医療技術や医療・社会福祉システムの発展や新たな創造も目指してください。若さと積極性を活かし、既成概念に囚われぬ挑戦により、自己実現とともに社会に貢献されることを願います。新潟大学歯学部・医歯学総合病院の教職員一同、皆さんの活躍を心より応援しています。

卒業生のことば

卒業生の言葉 — 全ての出会いに感謝して

歯学科6年 永澤芽衣

時が過ぎるのはとても早いもので、入学してから6年が経とうとしています。卒業という節目の時に大学6年間で振り返る機会を頂きましたこと、非常に嬉しく思っております。この機会に6年間で得た、たくさんの経験、出会いを記そうと思います。

大学に入学してからというもの、56期の同期をはじめ、先生方、患者さん、学部の先輩後輩、部活動、アルバイトの仲間など、踏み出す先にはいつでも出会いがありました。そんな数えきれないほどの出会いの中でも、今回は部活動と歯学部でのことについて書かせていただきます。

私の所属する陸上競技部は1年生当時の部員が5名ほど。それが今では、未だ少ないほうですが、16人となりたくさんの後輩ができました。56期は陸上部が私一人だけなので少し寂しさがありましたが、部活に行けば「芽衣さん〜！」と駆け寄ってきてくれて、皆いつでもあたたかく迎え入れてくれました。大学生活6年間の居場所を作ってくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。そして、何かに全力になり、仲間と共に一番

を目指すことの楽しさを知りました。走っている時に聞こえた応援の響きはいつまでも忘れません。

歯学部での出会いの多くは、やはり臨床実習でのことです。歯科医師の卵として患者さんと一対一でユニットに立ち診療することは、私にとって非常に高いハードルでした。そんな中でも、いつもそばには夜遅くまで対応してくださる各診療科の先生方、未熟な私にどこまでも優しい患者さん、いつでも助けてくれる引き継ぎの先輩方、技工室に帰れば笑わせてくれる同期、どんな時も応援してくれる家族がいました。多くの方々の支えがあって、この1年間を乗り越えられただけでなく、大きな成長ができたこと臨床実習が終了した今、実感しています。

この6年間、勉強だけでなく、学生にしかできないことを数え切れないほど経験させていただきました。今でも、技工室、外来ユニット、講義室、学校からの帰り道、競技場、バイト先、旅行先での溢れんばかりの景色が蘇ります。できるのであれば、もう少しだけでも皆とくだらないことで笑いながら過ごしたいです。しかし、何事にも「ずっと」はありません。だからこそ、この6年間に大きな価値があると思っています。この出会いと経験を糧にこれからも前に進み続けます。6年間本当にありがとうございました。



6年間を振り返って

歯学科6年 米山 明由莉

この度、歯学部ニュースの卒業生のことばを執筆させていただくことになりました歯学科6年米山明由莉です。私は歯学部ニュースの執筆依頼は来ずに大学を卒業することになるだろうと思っていましたので、このような機会をいただけて大変嬉しく思います。

思い返せば6年前の今は、新型コロナウイルスの流行真っ只中であり自分が思い描いていた大学生活とはとてもかけ離れた生活を送っていました。徐々に規制が緩和されていくと同時に、歯学部ならではの専門的な授業や実習が増えていき、面白いな、大変だな、自分は意外とセンスがないのかな、などと思いながら進級していきました。

基礎実習・ポリクリを経て5年後期から始まった臨床実習では、今後の歯科医師としての人生の中で大きな糧となる経験を沢山させていただきました。特に、初診の患者さんにおいては治療計画を立てて実際に治療をしていくという一連の流れを自分で行う貴重な経験ができました。治療をし

ていく中で思い通りに進まないことも多々あり、臨床の難しさにも直面しました。毎回、診療前のプレチェックや診療後のフィードバック、技工物のチェックなど遅い時間まで対応して指導して下さった先生方には感謝しきれません。先生方からは診療でのテクニックや臨機応変な対応をはじめ、患者さんへの配慮や向き合い方など医療従事者としての姿勢を学ぶことができました。また、臨床実習にご協力いただいた患者さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。長年臨床実習に協力いただいている患者さんから「手際が良くなったね」「あなたは水を吸うタイミングが上手ね」などお褒めの言葉をいただいた時、自分の小さな成長を感じることができてとても嬉しく思いました。

最後になりますが、6年間、所縁のない新潟でこれまで頑張ってきたのは多くの方々のおかげからです。少人数で協力し合った個性豊かな同期達、ご指導していただいた先生方、遠方から応援してくれた家族、携わっていただいたすべての方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。新潟大学での学びを忘れずにこれからも精進していきます。



6年間を振り返って

歯学科6年 小田切 美 築

この度卒業生のことばを執筆する機会を賜りました、歯学科6年の小田切美築と申します。原稿を書かせていただきながら、入学してもう6年も経ったのかと感慨深い気持ちになると同時に、大学生活に終わりが近づいていることへの寂しさを感じています。新潟大学入学から今日までの日々を振り返り、卒業生のことばとさせていただきます。

私たち56期生は、新型コロナウイルスが世界的に流行り始めた時期の入学となりました。新生活への期待よりも不安や戸惑いの方が大きかったと記憶しています。1年次はオンライン授業のみで同期との交流も少なく、今後の大学生活がどうなっていくのか不安に思ったのを覚えています。2年次になり、キャンパスを移り対面での授業も始まったことで、ようやく大学生活が本格的に始まったことを実感しました。その後順次始まった実習で、思うような結果が出せずくじけそうになりながらも、友人と励まし合いながら取り組んだことは、今となっては良い思い出です。

様々なことを経験した6年間でしたが、最も印

象に残っているのは5年生の秋から始まった臨床実習です。臨床実習ではこれまでの大学生活の集大成として、大きな学びを得ることができました。1年間の臨床実習を終えた今でも、患者さんの治療をするとなると緊張し身が引き締まる思いがしますが、臨床実習が始まった頃は特に怖く感じていました。先輩方からの引継ぎが終わり1人での診療が始まると不安でいっぱいでしたが、事前学習や先生方とのディスカッションなどできる限りの準備をして診療に臨みました。診療に時間がかかり患者さんや先生方にご迷惑をおかけしたり、レポートや製作物の締め切りが重なりくじけそうになったこともありましたが、患者さんから「治療してもらってよく噛めるようになった」と言ってくれたことが励みとなりました。嬉しいことや辛いことなど様々な経験がありましたが、日々が学びの連続であり、臨床実習を通じて成長できたと感じています。大変な時に支えてくださった先生方や同期のおかげで臨床実習を終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりますが、これまでご指導してくださった先生方、大学関係者の方々に深く感謝申し上げます。6年間の大学生活で学んだことを心に留めて、より一層精進してまいります。



4年間を振り返って

口腔生命福祉学科4年 山本花恋

この度、「卒業生のことば」を執筆させていただくこととなりました。口腔生命福祉学科4年山本花恋です。振り返れば、この4年間は歯科衛生士として、そして一人の人間として大きく成長させてくれた、かけがえのない時間でした。

入学当初の私は、歯科衛生士という職業について、十分に理解していたとは言えませんでした。ただ国家資格を取得し、安定した職に就きたいという思いを抱いていました。しかし、学年が上がり、講義や実習を重ねる中で、歯科衛生士が人の健康と生活を支える、責任とやりがいのある専門職であることを実感するようになりました。特に臨床実習では、患者さん一人ひとりに寄り添うことの大切さや、知識と技術だけでなく、思いやりの心が求められる仕事であることを学びました。また、3年次の福祉実習を通して、医療と福祉が密接につながっていることを知りました。歯科医療もまた、生活や社会と深く関わる分野であり、歯科衛生士としてできることはまだ多くあると感じました。この学びは、これからの私の進む道を考える上で、大きな指針となっています。4年生

として過ごした一年間は、臨床実習、国家試験対策、就職活動と、多くの課題に向き合う日々でした。自分の未熟さに悩み、立ち止まりそうになることもありましたが、共に学び、励まし合った仲間が存在が、前に進む力となりました。何気ない会話や共に過ごした時間のすべてが、今ではかけがえのない思い出です。大学生活では、歯学部サッカー部のマネージャーとしての活動にも力を注ぎました。2年次には、福岡県で開催されたオールデンタルにて4位という結果を残すことができ、チームを支える立場として貴重な経験をさせていただきました。4年生の夏に卒部するまで続けることができたのは、入学時に勧誘していただき、支えてくださった先輩方のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。

最後になりましたが、4年間にわたりご指導くださった口腔生命福祉学科の先生方、臨床・実習でお世話になった病院の先生方、歯科衛生士の皆様、そして支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。新潟大学の卒業生としての誇りを胸に、歯科衛生士として学び続け、人々の健康と生活に貢献できるよう精進してまいります。これをもちまして、卒業の言葉といたします。



卒業生の言葉

口腔生命福祉学科4年 川野 太 朗

この度、卒業の言葉を執筆させていただく機会をいただき、心より感謝申し上げます。入学から早いもので四年の月日が流れ、別れの季節を迎えました。この四年間を振り返ると、実に彩り豊かな日々でした。一年次は五十嵐キャンパスにて教養科目を学びながら、サイクリング部やダンス部での活動に打ち込みました。趣味を通じて多様な価値観に触れた経験は、私の視野を大きく広げてくれました。二年次から始まった専門科目では、聞き慣れない用語やPBLに苦労したこともありましたが、今となってはそれも良き思い出です。特に最終学年の一年間は、臨床実習、福祉実習、特論、そして国家試験対策と、非常に多忙ながらも、これまでにない達成感を得られた毎日でした。

大学生活における最大の収穫は、自身の将来像を明確に描けたことです。入学当初は漠然としていた目標ですが、大学病院での実習が大きな転機となりました。周術期管理や口腔外科疾患など、高度な歯科医療を間近で学ぶ中で、医療の奥深さと、患者さんの「全身」や「命」に、より深く関わりたいという想いが芽生え、看護の道を志すよ

うになりました。また、病院での福祉実習では、医療ソーシャルワーカーが看護師と密に連携し、患者さんの不安や退院後の生活調整に奔走する姿を目の当たりにしました。現場の医療ソーシャルワーカーの方から伺った「看護師が日々の会話から汲み取る情報は、退院支援において不可欠な力になる」という言葉は、今も胸に残っています。これらの実習経験を通じて、私は、看護師も福祉的な視点を持つことの重要性を痛感しました。新潟大学で学んだ歯科と福祉の知見は、看護の道に進む私にとって大きな強みとなると考えています。多角的な視点から患者さんを支えられる医療人となるのが、今の私の目標です。

共に切磋琢磨した十九期生のみんな、本当にありがとうございます。とても明るいクラスで日々の学校生活を楽しく送ることができました。みんながいたからこそ、ここまで歩んでくることができたと思っています。

最後になりますが、四年間温かくご指導いただいた口腔生命福祉学科の先生方をはじめ、病院の先生方、歯科衛生士の皆様、そして支えてくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。新潟大学歯学部で学んだ誇りを胸に、学生生活で得られたつながりや経験を大切にしながら、日々精進してまいります。



大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

予防歯科学分野 永島和裕

皆様こんにちは。予防歯科学分野の永島和裕です。拙稿ではございますが、ご覧いただけますと幸いです。

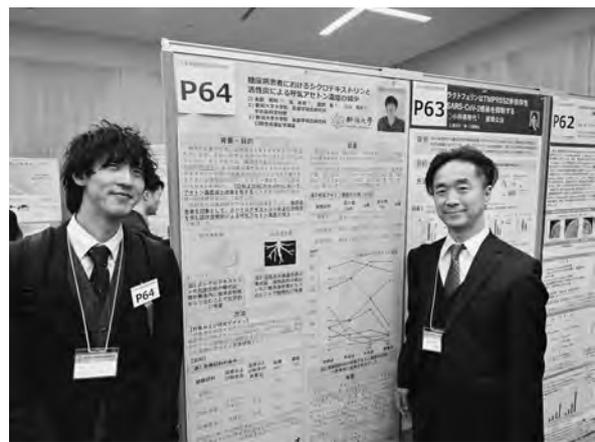
大学院に進んだ理由を一言でいうと、「人が好きだから」です。人は誰かに支えられて生きていて、頑張る力の源には、やはり「誰かの役に立ちたい」という気持ちがあるのだと思います。学生時代、口腔のことで皆さんが何に困っているのかを考える中で、口臭は多くの方が気にする悩みだと知りました。だからこそ、『仕組みを理解して、少しでも不安を減らす手助けができれば』そうした思いを抱き、私は大学院進学を決めました。

口臭は、最終的には人が不快と感じるか否かが本質であり、測定上は濃度低下が示されても、実際の臭気として減弱しているかを必ずしも断定できない場合があります（いくら「今日ビジュいいじゃん!」と思われても、第一印象を覆すのは決して容易ではないですし、原因物質も1500種類もあります）。しかし、その困難さこそが、同時に研究に取り組む醍醐味でもありました。

私の研究テーマは「糖尿病患者におけるシクロデキストリンおよび活性炭を用いた呼気アセトン濃度の減少」でした。次世代プロジェクトに採択いただき、1・2年次は基礎研究に取り組み、3・4年次には糖尿病・代謝内科との共同研究として臨床研究に取り組みました。多くの患者様にご協力いただき、学会発表の機会も頂戴できたことは、私にとって大きな財産です。

大学院進学を悩んでいる方は多くいると思います。私も大学院？予防歯科なの？といわれたのも正直なところですが、でもBUMPも言ってましたよ。「世界のための自分じゃない、誰かのための自分じゃない」って。自分のやりたいことをやってそれを正解にすればいいと個人的には思います。研究は辛いこともありますが楽しいです！私の好きなアイドルの曲にこんな歌詞があります。「一歩歩めばすべてが前に進むから、夢は逃げないから」いつもあきらめるのは、夢から逃げてるのは自分なんです。研究も同じです。あと一回、あと少しやってみればいい結果が出たのに…そんなことが多々あります。そんな時に自分を奮い立たせましょう！不撓不屈！そのための心の支えよりどころがあるとよりいいですね。まとまりなくてすいません。

最後になりますが、小川先生、濃野先生、高先生をはじめ、ご指導くださった先生方、そして支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。



口腔衛生学会にて（筆者左）

大学院修了にあたり

う蝕学分野 齋藤 瑠 郁

「入学者のことば」「大学院へ行こう」に続き、大学院生としては三度目の執筆となります。本当に私でよいのか思わず確認してしまいましたが、むしろぜひ、とお返事をいただきましたので、この機会に4年間の大学院生活を振り返ってみたいと思います。

約4年前、私は研究や教育に興味を持っていましたが、大学院進学を決断しきれずにいました。そんな中で、研修指導医から受けた熱い勧誘が後押しとなりました。大学院での経験は今しかできないと感じたことも進学の原因です。受け身の大学院進学ではありませんが、熱い勧誘の比重はとも大きく、そのおかげで今の私があります。

所属分野としてう蝕学分野を選んだのは、何より先生方を尊敬していたからです。研修修了後もお世話になりたいと思いました。また、根管治療が好きなこと（時に変人扱いされます）はう蝕学分野で成長を目指す上での大切なモチベーションでした。TAとして学生実習に参加する時間も毎回いろいろな意味で驚きがあり、新鮮さを楽しく感じていました。

研究は微生物感染症学分野で取り組んできました。テーマは、非抗菌性エリスロマイシン誘導体による免疫調節作用の解析です。詳細については検索していただければと思います。基礎分野での研究に取り組んだきっかけは、研修医の冬、研究費の申請書を作成することがきっかけとなって、制度に詳しい先生のサポートを受けたいと考えたことでした。そこで提案いただいた研究テーマが

微生物学・薬学・免疫学を横断する内容でした。学生時代から特に興味を持って学んだ分野であったこともあり、研究初日から今日までずっと研究を楽しむことができています。先生方、いつもご指導いただきありがとうございます。

大学院生活では臨床と研究の両立も大きなテーマでした。臨床から離れる気は全くなかったものの、基礎分野での研究を選んだのに臨床を続けて良いのか悩みました。しかし先生方は、臨床ニーズを知っているからこそできる研究があると応援してくれました。両立を目指した結果、自分の首を絞めることもありましたが、暇が苦手な私にとって、毎日が慌ただしいことはむしろ幸せなことだったと思います。

辛いこともあったので正直に書きます。大学院4年間で最も辛かった時期は明らかで、大学院2年の冬から3年の春、ある申請書を作成していた頃です。食事や睡眠を疎かにしたストレスからか、1か月で体重が3kgも減りました。のちに、他大学の大学院に進学した友人の話を聞いて、自分の辛さは大したことではなかったと知りましたが、恥ずかしながら当時は、自分が一番辛いと思い込んでいました。逆に、最も嬉しかったことは、不健康な減量後の体重をなぜか今も維持できていることです。というのは半分本音半分冗談です。まじめに言うと、論文受理や受賞など、時間をかけて取り組んできたことが目に見える形で評価されたことが嬉しかったです。多くを経験した濃い4年間でした。

結びに、お世話になった皆様に心より感謝申し上げます。今後は、恩返しができるよう今まで以上に精進していきたいと思います。

大学院修了にあたり

口腔生命福祉学科博士後期課程3年
中村 夢衣

口腔生命福祉学専攻博士後期課程3年の中村夢衣と申します。このたび、「大学院修了にあたり」という題で寄稿の機会をいただきましたので、大学院生活を振り返りながら、これまでの経験をともに述べさせていただきます。

口腔生命福祉学科を卒業後、博士前期課程に進学し、大学院生活が始まりました。社会人大学院生として、群馬県の総合病院に歯科衛生士として勤務した後、新潟大学医歯学総合病院に入職し、現在は医療連携口腔管理治療部の専任歯科衛生士として勤務しております。

臨床業務の合間に講義や課題、研究活動に取り組むのは決して容易ではありませんでしたが、非常に充実した日々を過ごすことができました。研究活動を始めた当初は統計ソフトの扱いに苦戦しましたが、指導教員の先生方のご助言のもと、少しずつ分析作業を進めることができました。博士前期課程では学会発表の機会もいただき、第71回口腔衛生学会学術大会にて優秀発表賞を受賞した際には、大変驚くとともに、心から嬉しく思った

ことを今でも鮮明に覚えています。

博士後期課程では、「食事摂取におけるナトリウム/カリウム比と現在歯数との関連」について研究を行いました。ナトリウム/カリウム比は、ナトリウム摂取制限（減塩）やカリウム（野菜や果物などに多く含まれる）摂取の促進それぞれよりも高い降圧効果があるとされています。そこで私は医歯学総合研究科健康増進医学講座において実施されている魚沼地域での大規模調査のデータを用いて分析・検討を行いました。その成果は、第74回口腔衛生学会学術大会にて発表させていただきました。

博士前期課程から始まった大学院生活も気がつけば5年目を迎えました。研究活動が思うように進まず、心が折れそうになったこともありましたが、そのたびに支えてくれたのは共に学んだ同期や日々ご指導くださった先生方の存在でした。皆様の支えがあったからこそ、ここまで歩んでこられたのだと、心から感謝しております。

最後になりますが、5年間にわたりご指導・ご支援を賜りました先生方をはじめ、これまでお世話になった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。これまでの経験を糧に、今後も一層精進してまいります。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。



第74回口腔衛生学会学術大会での口演発表の様子

臨床研修修了にあたり

臨床研修修了にあたり

Aコース臨床研修歯科医 石塚公都

この度執筆の機会を賜りました2025年度臨床研修Aコース研修歯科医の石塚公都です。

まず始めにこの場をお借りして、藤井規孝教授をはじめ歯科総合診療科先生方に、日頃より温かいご指導頂いておりますことに厚く御礼申し上げます。また共通研修でご指導頂いた診療科先生方、日頃よりお世話になっております臨床研修センター齋藤様、病院関係者の皆様におかれましては大変感謝申し上げます。

臨床研修Aコースは、歯科総合診療科で1年間研修を行うプログラムです。例年Aコースの人数は十数人いたのですが、今年度は5人しかいない状況でした。私自身、学生時代は模型実習や臨床実習でうまくいかないことが多く、研修前はやっていけるのか正直不安が大きかったです。しかし実際に研修が始まってみると、とても充実した研修を送ることができました。例年は二人一組でペアを組んで診療をしていたそうですが、今年度は診療の空いている研修医がその都度補助に入るようにして診療を行っていました。そのため、Aコースの患者さん全体としてどのような状態の患者さんがいて、どのような問題点があって治療方針を組んでいるのかを学ぶことができ、症例に対する理解を深めることができたと思っています。そして何より無事に研修を行うことができているのは、先生方の支えがあってからこそだと思っています。研修医の人数は少なかったですが、その分厚くご指導を頂くことができ、どこがよくなかったかなど改善点をその都度学ぶことができました。先生方には多々ご迷惑をおかけし

たかと思いますが、辛抱強くご指導いただき、大変感謝しています。

同期の研修医は5人全員男で、人数が少なかった分、絆を深めることができたと思います。大変なこともありましたが、お互い励ましあって支えながら、乗り越えていくことができたと思います。休日には全員で遊びに出かけたり、飲み会をしたりと、プライベートでも楽しい時間を過ごすことができました。むしろこの5人だったからこそ、これだけ充実した研修医としての日々を過ごせたと思っています。Aコースの研修医として一緒だった4人にも感謝したいです。

1年間の研修を通して多くのことを学んだことで、歯科医師としてまだまだ不足している部分も多くあると感じました。研修医として学んだことを大切にして、今後も勉強に励みたいと思いました。



臨床研修終了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 小杉沙綺

この度執筆の機会を賜りましたプログラムB研修歯科医師の小杉沙綺と申します。プログラムBは、新潟大学の専門診療科と協力型研修施設の双方で、それぞれ半年ずつ研修を行うコースです。私は4月から9月まで長岡赤十字病院にて研修を行い、10月からは新潟大学医歯学総合病院の口腔再建外科にて研修させていただきました。

私は研修期間を通して前半・後半ともに口腔外科を中心とした診療に携わらせていただきました。外来診療では、抜歯をはじめとする口腔外科処置や周術期口腔管理、粘膜疾患、腫瘍の術後経過観察など、多岐にわたる症例を経験しました。いずれの場面においても、指導医の先生方の丁寧なご指導のもとで診療に参加し、基礎的な知識と実践的な技術を学ぶことができました。また、口腔癌、顎変形症、嚢胞などの全身麻酔下での手術にも助手として関わらせていただきました。

臨床研修開始当初は、大学で学んできた知識と実際の臨床現場との違いに戸惑うことも多くありました。特に、水平埋伏智歯抜歯や手術前後の全身管理など、これまで経験したことのない処置や対応に直面し、歯科医師としての責任の重さを強く実感しました。そのような中でも、先生方が一

つ一つの症例について丁寧に指導していただき、自身の改善点や課題を明確に示していただいたことで、徐々に自信を持って診療に臨めるようになりました。

さらに、患者とのコミュニケーションも重要であると実感しました。外来で行う口腔外科処置に対して不安を抱く患者さんは多く、術前に分かりやすく説明を行い、術中にも声かけをすることで、患者さんの不安軽減につながることを学びました。医療技術だけでなく、患者さんの気持ちに寄り添う姿勢が診療において非常に大切であると感じています。

一方で、自身の知識や経験の不足を痛感する場面も少なくありませんでした。学んできた知識を臨床の場で十分に活かさないことや、処置中に迅速な判断や臨機応変な対応が求められる場面では、未熟さを感じることも多くありました。これらの課題を克服するためにも、今後も継続して学習と経験を重ねていく必要があると考えています。

最後になりますが、日々ご指導いただきました先生方をはじめ、歯科衛生士、看護師の皆様により感謝申し上げます。この一年間の研修で学んだことを忘れず、今後も歯科医師として研鑽を積み、より良い医療を提供できるよう努力してまいります。最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

臨床研修終了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 野村陽菜

この度、執筆の機会を賜りました研修歯科医師の野村陽菜です。研修プログラムBで研修を行っています。プログラムBは、新潟大学の専門診療科と協力型研修施設で半年間ずつ研修するコースです。私の場合は、4～9月は新潟大学の義歯診療科で、10月からは会津中央病院の歯科口腔外科にて研修を積ませていただいております。

前半の研修先の義歯診療科では、義歯、クラウンブリッジによる補綴処置やう蝕・根管治療などの保存修復処置を多く経験させていただきました。患者様一人一人の口腔内を一口腔単位で捉え、全体を考慮した治療計画を立案することは決して容易ではありませんでした。しかし、診療ごとに指導医の先生方からフィードバックをいただき、その内容を踏まえて次の診療に活かすことで、事前に十分な準備を行うことの重要性を学びました。これまでの治療での反省や失敗を糧に、患者様の問題点から必要な治療を考える力を鍛え

ることができました。

10月から会津中央病院の歯科口腔外科での研修が始まりました。会津中央病院では、抜歯や全身麻酔下での手術、入院患者の口腔管理、嚥下評価など幅広い診療を経験させていただいております。これまで抜歯や嚥下評価を行う機会がなかったため、思うようにいかない場面も多くなりました。しかし、指導医の先生方のご指導のもと、どのようにすれば改善できるのかを考えながら診療に取り組むことで、少しずつではありますが、自身のレベルアップを実感しています。また、口腔内だけでなく、全身状態を踏まえた評価の重要性を学ぶことができました。

最後になりますが、ご指導いただきました先生方、歯科衛生士の皆様に感謝申し上げます。歯科医師としては未熟ですが、研修医として1年間学んだことを忘れずに、今後も日々努力していきたいと思っております。そして、患者様に満足していただけるような治療ができる歯科医師になりたいと思っております。最後までお読みいただき、ありがとうございました。



新潟大学義歯診療科にて 筆者前列右から3番目

SSSV・SCRP・国際学会参加の報告

学生短期海外交流プログラム
(SS・SV) の報告

高度口腔機能教育研究センター
石田 陽子

新潟大学歯学部では、学生短期海外交流プログラム（通称SSSV：ショートステイ・ショートビジットプログラム）を行っております。

【SV（本学学生を派遣するプログラム）】

派遣先は毎年変動します。プログラム内容は現地教員に一任しております。昨年度の参加学生の報告をお楽しみください。

2025年3月：WHO本部、スウェーデン、ベトナム、タイ

今年度は以下の派遣プログラムが決定しております。

2026年3月：WHO本部、スウェーデン、ポルトガル、ルーマニア、タイ、台湾

【SS（短期留学生受入プログラム）】

交流協定のある外国の大学歯学部から、8月と3月に短期受入プログラムを行っております。留学生は歯学部の教員から英語で講義・実習を受け、大学病院歯科部門、口腔外科手術室の見学をします。講義実習では学部生向けから将来の大学院入学を見据えた研究紹介もしております。8月のプログラムでは本学の学生実習の見学を盛り込み、自国の歯学教育との違いを体験してもらいました。多くの留学生が、「ここまで丁寧に実習書が作成され、指導教員が親切に指導してくれるとは、本当にうらやましいです！」と言ってくれました。プログラム中の放課後や休日などには本学学生と食事や観光に出かけております。



2025年3月 スキー体験



2025年8月 GCデンタルオアシス見学

コンケン大学・チュラロンコン大学SSSV参加報告

医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻 2年
穴 戸 香

2025年3月に、海外留学支援制度（SSSV）プログラムでコンケン大学とチュラロンコン大学へ訪問させていただきました。ご縁があり、歯科衛生士として参加させていただきましたので、その内容を報告させていただきます。

成田空港からタイへ入国し、バンコクから1時間飛行機に揺られコンケンへ辿りつきました。タイでの初めての感想は暑いことだったことを覚えています。雪国の冬をなんとか切り抜けた私にとってタイの暑さは大きな環境の変化を実感させるものでした。

今回私たちはコンケン大学にて主に臨床実習の見学や小学校でのボランティア活動に参加させていただき、チュラロンコン大学では、東北大学歯学部の学生と臨床現場の見学を行いました。全ての経験が貴重なものでしたが、特に2つのことが記憶に残っています。

1つ目はコンケン大学とチュラロンコン大学の主な違いについてです。コンケン大学があるコンケンは、タイの東北地方の主要都市で、日本でい

うところの仙台に当たるそうです。大学の周囲には広大な自然が広がり、その中心には大きなケンナコーン池がありました。大学自体も非常に広く、まるで1つの街のようで、大学内の移動にはバスが用いられています。地域に根付いた大学であり、私たちは小学校での学生ボランティアに参加する機会をいただきました。一方、チュラロンコン大学はタイの首都バンコクの中心に位置しています。まるで、渋谷の真ん中に大学があるような感覚と言うとわかりやすいように感じます。大きいオフィスビルのような病院の中には、最新の設備や技術が数多く揃っており、とても興味深いものでした。

2つ目は、学生の臨床経験の豊富さです。タイの歯学部では、日本のように歯科医師免許取得後の臨床研修制度はなく、その代わりに在学中に臨床実習として数多くの治療を行なっているそうです。診療所の多くは学生が診療を行うスペースとして運用されており、学生が主体的に治療に取り組んでいる様子が印象的でした。

改めまして、このような貴重な機会を与えてくださった石田先生、小川先生、引率いただきました大倉先生、お世話になった全ての方々に深く感謝申し上げます。今後もSSSVプログラムがより多くの学生の、より豊かな交流と学びの場となることを願っています。



初めてのトゥクトゥク（筆者は左端）

タマサート大学・マヒドン大学 (タイ) へのSSSVに参加して

歯学科4年 小泉文哉

2025年3月にタイでの16日間のプログラムに参加しました。前半2日間は首都バンコクのマヒドン大学を、後半の2週間ではバンコクから北へ約40キロ離れたタマサート大学を訪問しました。

マヒドン大学はバンコク市内にあり高架鉄道からも近く非常に都会的な場所にあり、建物、設備等も新しく周辺の環境とともにタイの経済的発展を感じることができました。

タマサート大学では前半の1週間は各科の講義を受け、後半の1週間は1人ずつ現地の5年生の臨床実習班に配属され実習を見学しました。

今回の訪問で印象に残ったこととしては、第1に歯科におけるデジタル技術の進歩です。プログラムの中で受けた講義ではAIを活用した画像診断や、デジタル技術を活用した設計、仮想現実の活用、AIを活用した歯蝕診断など、AIやデジタル技術に関するものが多く含まれていました。学部の3年生が終わり臨床科目を学び始めた段階ではありましたがその進歩について非常に驚かされました。

また現地の学生の英語力、特に専門分野での英語力の高さにも驚かされました。現地の学生の臨床実習を見学していると診療の内容について流ちょうな英語で解説していただき、自然とテクニカルタームが英語で出てくるためついていくのに苦労しましたが日本語が完全に通じない中1人で乗り切るという経験は非常に鍛えられる経験でも

ありました。

今回の訪問ではバンコク周辺の地域ということもあり、タイについてそして東南アジア地域の発展についても学べる良い機会ともなりました。バンコク市内は鉄道網も発達し、巨大なショッピングモールが存在するなど非常に発展している様子が伺えました。また、タマサート大学から北に行ったところにある古都アユタヤではタイの歴史的な遺跡を見学することができたとともに、Japanese Villageという16世紀に日本人町があったことを記念する施設もあり、日本との関係の深さを知ることができました。

今回は自分自身にとって2回目のプログラムへの参加であり、前はベトナム、ハノイでのプログラムへの参加でしたが、同じ東南アジア地域であっても国によって似たような事情もあれば違うような事情があることが肌を持って体感できました。自分自身このようなプログラムに参加する価値は現地の空気をリアルに感じることでありとこれまでのプログラムへの参加を通じて感じます。現地で感じる経済発展へのスピード感は想像以上に速く、テクノロジーの進歩と可能性を考えさせられる話を多く聞くことができました。今回のプログラムへの参加を通じ、今後の最先端テクノロジーに対する理解を深め、それを活用できる歯科医師となれるよう、英語や歯学の学習についてのモチベーションも高めることができる経験になったと感じています。

最後になりますが、引率して下さった前川先生、派遣にあたりご指導して下さった石田先生をはじめ、携わって下さったすべての方々に感謝申し上げます。

アメリカ・ペンシルバニア大学へのSSSVに参加して

歯学科4年 白髭美帆

本プログラムは、2025年3月1日から3月17日までの約2週間、照沼先生の引率のもと、歯学科5年の清水、歯学科3年の白髭の2名で参加しました。羽田空港を出発し、トロントを經由してフィラデルフィアへ入国し、3月3日よりアメリカ・ペンシルバニア大学歯学部にて臨床研修が開始されました。

プログラム初日はオリエンテーションおよびキャンパスツアーが行われ、その後、保存修復学、小児歯科、障がい者歯科、歯周病科、口腔内科、歯内療法学、補綴学、矯正歯科学、公衆衛生学など、幅広い分野の見学および実習に参加しました。小児歯科ではシーラント処置やサハライド塗布、外傷歯の修復処置を見学し、バキューム補助を行う機会もいただきました。また、障がい者歯科ではTEACCH法を実際に目にし、日本の臨床実習では得難い学びとなりました。

歯周病科ではインプラント一次埋入手術の見学を行い、学生の段階から外科的処置に関わる教育体制に強い刺激を受けました。さらに、口腔内科では生検の流れや口腔外科・病理学との連携について学び、日本との診療体系の違いを実感しました。顎矯正手術や再建手術の見学を通して、歯科医師だけでなく医師や看護師など多職種が連携す

ることで医療が成り立っていることを再認識しました。

本プログラムを通じて、私は二つの大きな学びを得ました。

一つ目は、アメリカの歯科医療の在り方を日本と比較しながら体感できたことです。日本では学生が診療に関わる範囲が限られていると感じていましたが、アメリカでは学生の段階から主体的に臨床へ関わる姿が印象的でした。歯科衛生士免許を有する立場で多くの診療科を見学させていただく中で、自身の知識や経験の不足、視野の狭さを痛感すると同時に、さらに学びたいという意欲が強まりました。

二つ目は、臨床研修以外の場面を通じて感じた、アメリカの社会的・文化的背景を含む空気感です。チリからの留学生や、ユダヤ文化を背景に持つ学生、日本で生まれ育っていない日本人学生との交流を通じて、多様な価値観や自己表現の在り方に触れることができました。これらの経験から、異なる文化的背景を理解し尊重する姿勢の重要性を学びました。

今回の留学は、歯科医師としての将来を考える上で、自分の現在地を知る非常に有意義な経験となりました。

最後に、本プログラムを企画・引率して下さった照沼先生をはじめ、小川先生、石田先生、そして現地で関わって下さったすべての方々へ心より感謝申し上げます。



小児歯科でお世話になったGreg先生と（筆者一番左）



ペンシルバニア大学在校生、チリ人留学生と共にユダヤ料理店にて（筆者右奥）

ベトナム・ホーチミン医科薬科大学とハノイ医科大学へのSSSVに参加して

歯学科3年 高 桑 滯

2025年3月1日から12日間ベトナム・ホーチミン医科薬科大学を、その後4日間ハノイ医科大学を訪問し、計16日間のSVプログラムに参加しました。訪問当時は2年生で基礎科目しか履修していませんでしたが、この期間は私の歯学部生活を大きく彩る貴重な経験となりました。

ホーチミンでは、同年代の学生が相互実習を行っていること、その手技の確かさに大きな刺激を受けました。支台歯形成や義歯製作に加え、病理学の講義も経験でき、現在履修している歯冠修復学や顎口腔機能学などの理解が格段に深まり、学びの定着にも大きく役立っています。

また、ホーチミンではう蝕の蔓延が著しく、貧富の差が治療の選択を左右し、健全歯であっても抜歯せざるを得ない現実がありました。「歯を残す」という日本の理念が、いかに恵まれた環境に支えられているかを痛感しました。一方で水道水フロリデーションなど予防意識も根付きつつあり社会全体としてう蝕予防に取り組み始めています。また、学生治療が安価に受けられる制度もあり、患者確保と経済的負担軽減につながる良い取り組みだと感じました。

ハノイではインプラント研修で豚骨実習や縫合トレーニングを見学しました。日本では学生段階でこのようなことを学べる機会が少ないため学生段階で学べる環境を羨ましく思います。

歯科以外でも多くの発見がありました。ベトナムはバイク社会で、信号があっても横断できないことが多く、毎回命の危険を感じました。う蝕が見つかったり、SIMカードが使えず現地の携帯会社で買いなおしたりとハプニング続きでしたが、そのすべてが良い思い出です。また、同じベトナムでも文化が大きく異なる点も印象的でした。日本の“出汁”に近い風味を感じる料理が多いハノイ、エネルギッシュな雰囲気と豊かな食文化を持つホーチミン。パクチーの好みさえ都市ごとに違うことを知り、まるで東京と大阪のようで大変興味深く感じました。

現地学生とは放課後を共に過ごし、強い絆を築くことができました。同年11月、彼らが来日した際に再会し、涙が出るほど嬉しい瞬間でした。また、彼らからベトナム戦争や独立の歴史を学び、自分の無知さを実感し、もっと学ばなければいけないと感じました。

この16日間の経験は歯学への姿勢を大きく変え、国境を越えた学生交流の価値を実感する機会となりました。今後の実習にこの経験を生かしていきたいと思います。最後になりますが、ご支援くださった石田先生、小川先生、引率の真柄先生に深く感謝申し上げます。



口腔外科での手術見学にて（筆者左から2番目）

WHO・マルメ大学でのSVを終えて

歯学科4年 鈴木綾乃

私は昨年度の3月にスイス・WHO、スウェーデン・マルメ大学のSVに参加しました。3月3日に日本を出発しジュネーブに5日間、マルメに12日間滞在しました。

スイスでは、WHOおよびSUNSTARを訪問しました。WHOでは、参加学生が事前に準備した質問をもとに意見交換を行い、歯科分野においてWHOが現在直面している課題について理解を深めました。国際的な立場から歯科医療の現状や将来を考える貴重な機会となり、議論も大変活発なものとなりました。SUNSTARでは、同社が取り組む研究活動や商品開発について説明を受けました。臨床現場とは異なる視点から口腔の健康を支える企業の役割を知り、歯科医療を多角的に捉える重要性を実感しました。さらに、WTOで開催された国際機関と学生の交流会では、国際機関の関係者や現地の歯学部生と交流し、視野を広げることができました。

スウェーデンでは、マルメ大学とTePeに訪れました。マルメ大学では、模型実習の見学や授業への参加、5年生による卒業論文中間発表の聴講、臨床実習の見学など、多様な教育現場に触れる機会をいただきました。学生が主体的に学ぶ姿勢や、教育システムの違いは非常に印象的でした。TePeでは、歯ブラシや歯間ブラシの工場を見学させていただき、環境に優しい取り組みについての説明を受けました。

本SVを通じて得た経験は、学術的な学びだけでなく、人とのつながりという面でも大きな意味を持つものでした。ジュネーブでの交流会や、マルメ大学主催のJapan Bridge Scandinavia交

流会に参加し、現地の方々と積極的に交流することで、プログラムの枠を超えた学びや出会いを得ることができました。

また、夏のSSで新潟大学に受け入れた学生とも再会し、彼女の自宅に招かれてKubb（棒倒しゲーム）をしたり、シナモンロール作りをしたりするなど、文化的な交流も行いました。こうした経験は、教室での学修だけでは得られない、国際交流ならではの貴重な体験であったと感じています。

初めは積極的に行動することに不安もありましたが、一歩踏み出すことで多くの学びと出会いを得ることができました。この経験を今後の臨床実習や学修に生かし、主体的に取り組んでいきたいと考えています。またこれからSVへの参加を予定している学生や、参加を検討している方々にとって、本プログラムが大きな成長の機会となることを願っています。

最後に、日本からスイス、スウェーデンまで引率してくださった竹原先生をはじめ、WHOおよびマルメ大学訪問に際しご支援くださった小川先生、石田先生、ならびに現地でお世話になったすべての先生方に、心より感謝申し上げます。



筆者左から3番目

歯学部生の今

歯学部生の今

歯学科1年 松本七香

暴風雨に驚かされ、曇天の空に飽きてきた師走に「歯学部生の今」というお題の原稿依頼が届きました。せっかくの機会ですので、入学してからを振り返りながら執筆することにしました。

全員が受験に向けて勉強を第一にしていた高校生の時と異なり、各々が別々の目標をもって生活をしています。大学1年生ということもあり、比較的、単位習得は容易です。1学期は早期臨床実習と歯学スタディスキルズが毎週金曜日に旭町キャンパスでありました。早期臨床実習では歯学部に入學した実感と歯科医師の卵としての自覚が芽生えました。しかし、残念なことに2学期は歯学部の専門科目がありません。「早く専門科目について学習したい」と、はやる気持ちを抑えながら、教養人になるべく、幅広い分野を履修することを心掛けました。これまでの学習とは異なり、社会福祉学やストレスマネジメントといった生活と直結している学問や反対に心理学のような抽象的な学問について学習することができ、興味深かったです。

勉強以外にもたくさん経験した一年でした。私は歯学部の軽音楽部に所属しており、キーボード担当として、バンドを組んでいます。年に5回ほどライブがありますが、その都度バンドを組んで出演しています。そのため同級生と出演することも

あれば、先輩と出演することもあります。軽音は初心者で、わからないことだらけですが、経験者の同級生や先輩に教えていただきながら楽しんでいます。

大学には年齢や出身地、入学までの経緯等、様々な人がいます。半年以上が経ち、友人たちと入学時よりも深い話ができるような関係性になりました。経験してきたことが全く違うので、価値観が異なり、話していてとても楽しいです。自由に使える時間が増え、遊びに行ける範囲も広がったので、初めて経験することもしばしばあります。何事も新しいことというのは面白いものです。失敗が許される大学生のうちに沢山のことに挑戦していきたいです。

また、2学期になるとバイトを始める友人も多いです。バイト先の珍事を話すと、友人達からも面白いエピソードがいくつも出てきます。いろいろな職場について知ることができ、興味深いです。私はオンライン家庭教師と結婚式場のバンケットスタッフの二つの職場で働いています。まったく違う職場ですが、日々学ぶことが多くあります。将来の職とは関係ないバイトをあえてすることで、視野を広げ、より人間としての深みを増していきたいと考えています。

後3か月ほど過すと2年生に進級し、いよいよ歯学部生として本格的な勉強が始まります。自分が目指すべき姿を見失わないよう、勉強に励みつつも大学生活を謳歌したいです。

歯学部一年の今

歯学科1年 須藤泰斗

歯学部に入學して一年目の現在は、まだ専門的な歯学の授業が始まっていない。授業は、一般教養の科目が中心で、幅広い分野に触れる時間が続いている。心理学、統計学、語学など、高校ではあまり馴染みのなかった内容も多く、新しい知識に触れる面白さと、大学ならではの難しさを同時に感じている。

一般教養の授業は、歯科医療と直接結びついていないわけではないが、学んでいくうちに「これは将来にもつながるかもしれない」と思う瞬間がある。心理学で学ぶ人の心の動きやコミュニケーションの考え方は、患者さんと接する際に役立つそうだし、統計学で身につくデータの扱い方は、研究論文を読むときに必要になるだろう。語学の授業では、海外の文献に触れる機会が増える将来を考えると、基礎力をつける良い時間だと感じる。今はまだ歯学そのものに触れる機会は少ないが、こうした基礎的な学びが、これから専門科目に進むための土台になっていくと実感している。

大学生活のもう一つの大きな柱になっているのが、歯学部のバスケットボール部での活動だ。練習は決して楽ではないが、汗をかくと頭がすっきりし、日々の疲れもどこかへ消えていく。男子校出身の自分にとって、この部活の空気はどこか落ち着く。高校時代は、良くも悪くも男子だけの世界で、変に気を遣う必要もなく、素のままでいられた。大学に入ってから、男女が混ざる空気に最初は少し緊張したが、部活では高校の延長のように自然体でいられる。部活の仲間は同じ歯学部ということもあり、授業のことや将来の進路につ

いて気軽に話せる存在だ。専門科目が始まる前の段階でも、互いに励まし合いながら過ごせる環境はとても心強い。

また、部活動を通して先輩と関わる機会も多く、大学生生活の過ごし方や勉強のコツ、専門科目が始まってからの様子など、実際の経験に基づいた話を聞けるのは大きなメリットだ。先輩たちが忙しい中でも部活を続けている姿を見ると、自分もこれからの学びに向けて頑張ろうという気持ちになる。部活は単なる運動の場ではなく、大学生生活全体を支えてくれる大切なコミュニティになっている。

大学では自由な時間が増える一方で、自分で時間を管理する必要がある。一般教養の課題やレポートは思ったより多く、締め切りに合わせて計画的に進めなければならない。高校のように細かく管理されるわけではないため、最初は戸惑うこともあったが、授業と部活動を両立する中で、少しずつ自分なりのペースがつかめてきた。忙しいと感じることもあるが、その分だけ充実感も大きい。

歯学部一年生の今は、専門的な学びが本格的に始まる前の準備期間である。焦る必要はなく、まずは基礎をしっかり固めることが大切だと思う。一般教養で得た知識や考え方、部活動での経験、仲間とのつながりは、これからの大学生活や将来の自分を支える大切な土台になるはずだ。

これから専門科目や実習が始まれば、忙しさはさらに増していくと思う。それでも、一年生として過ごす今の時間は、大学生活の基礎をつくる重要な時期だ。日々の学びや経験を積み重ねながら、少しずつ歯学の世界へ近づいていきたいと考えている。

歯学部生の今

歯学科2年 雨海 祐花

早いもので、もう歯学科二年の後期が終わりを迎えようとしています。後期では前期と比べてグループでの活動や実習が増え、歯学部生としての自覚を強く持つようになりました。課題や試験に追われる日々ではありますが、その分、一日一日が充実しており、自分が確実に前に進んでいることを感じています。

そのような中で、私を大きく支えてくれた存在の一つがバドミントン部です。練習や試合を通して、先輩方からは技術面だけでなく、忙しい中でも学業と部活動を両立させる姿勢や、物事に真摯に向き合う大切さを学びました。また、部活動の場にとどまらず、学業面での悩みや勉強方法についても、先輩方は快く相談に乗ってくださいました。試験前に不安を感じたときや、授業内容の理解に行き詰まったときに、経験を踏まえた助言をいただけたことは、大きな心の支えとなりました。後輩の存在もまた、自分にとって良い刺激となりました。私が教えられることは多くはありませんが、教える立場になることで、自分自身の行動や言動に責任を持つようになり、少しずつ成長できていると感じています。バドミントン部は、心身のリフレッシュの場であると同時に、人とのつながりや支え合うことの大切さを実感できる場所です。

学業面では、図書館で共に勉強する友人の存在も欠かせませんでした。難しくなっていく授業内容に不安を感じることもありましたが、同じ目標を持つ仲間と励まし合いながら勉強することで、前向きに取り組むことができました。分からない部分を教え合ったり、時には何気ない会話を交えながら長時間机に向かったりする時間は、私にとって大切な思い出です。一人では乗り越えられなかったであろう、二年生の鬼門と呼ばれる前期の期末試験も、友人の存在があったからこそ乗り切れたのだと思います。互いに支え合いながら努力できる仲間恵まれたことに、心から感謝しています。

忙しい日々の中で、時間の使い方や物事への向き合い方にも変化が生まれました。限られた時間を意識的に使うようになり、優先順位を考えて行動する力が少しずつ身についてきたと感じています。また、思うようにいかないことがあっても、すぐに諦めるのではなく、どうすれば乗り越えられるかを考える姿勢が身についたことも、自分の成長の一つだと思います。

歯学部での学びは決して楽なものではありませんが、多くの人に支えられながら過ごしたこの日々は、私にとって大きな意味を持つ時間でした。これからさらに専門性が高まり、忙しさも増していくと思いますが、これまでの経験を糧に、歯科医師を目指す学生として、そして一人の人間として成長し続けていきたいです。

歯学部生の今

歯学科2年 石川 凌久

入学しておよそ2年が経とうとしている今、自身の歯学部生としての生活を振り返る機会をいただけたので、2年生での生活を通して感じたことについて書いていこうと思います。

2年生での生活は、1年生の頃と比べると格段に忙しくなったと感じています。1年生の頃は比較的自由な時間が多く、余裕を持って生活していましたが、2年生になると毎日のように授業があり、1年生がいかに緩かったのかを実感しました。また、1年生は高校の延長線上の内容の授業が多かったように思いますが、2年生からは少し専門性のある内容の授業となり、内容が難しく、勉強に要する時間が増えました。そのうえテストが1つ終わったと思ったら別の教科のテストが近づき、各教科のテスト勉強が大変で目が回りました。特に、9月に前期日程の各教科のテストがまとまって行われた時は、友人と朝やお昼くらいから図書館へ行き、夜の10時まで勉強するという生活を送っていて、地元の友人が遊んでいる様子を見て、羨ましさを感じることもありました。

現在、9月の怒涛のテスト期間を無事に終えて、後期日程に入っています。後期日程は部活の先輩から比較的余裕があると聞いていて、遊んだり旅行に行ったりできるだろうかと楽しみにしていました。確かに前期日程と比べて授業のコマ数

が減り、好きなことに費やす時間は少し出来ました。後期日程は実習や発表系の授業が多く、実習のレポートを書いたり、発表のスライドを作成したりと、やらないといけないことは多々ありました。こうして原稿を書いている今も、テストまで後3日に迫っています。年末年始の休暇を実家でゆっくり過ごしたことを後悔しています。今日も朝から図書館へ行き、勉強の傍ら、原稿を仕上げています。

ここまで読むと、歯学部の大変さばかりが目立ち、なぜこの学部を辞めないのかと疑問を思う人もいるかもしれません。歯学に興味があるということや、たった2年しかこの学部に通っていないということもありますが、普段の授業では、臨床や国家試験の話と結び付けて教えてもらえ、今受けている授業が今後、どういう所に役立つのかを認識でき、今後への興味が高まりました。また部活の先輩や先生と話をする機会が何度かあり、3年生以降の学年ではどういうことを勉強するのか、卒業した後はどういう環境が待っているのか、今後の話を聞くことが自身の勉強の糧になることもありました。このように、将来のために頑張りたいと思える環境がこの大学には整っていると私は思います。

最後に、私はバレーボール部に所属していて、部員が少ない状況の中、部員同士で協力して練習を行っています。もしこの文章を読んでいるあなたが新入生なら、4月の部活動体験期間、ぜひバレーボール部に見学しに来てください。

折り返し地点に立って

歯学科3年 神向寺 咲

10月から後期授業が始まり、私の学生生活は大きく変化した。これまでの基礎科目を主とした座学の毎日から一変し、歯科医師としての第一歩を実感させる本格的な実習が始まった為である。白衣を着て、実習室という新たな環境に身を置く中で日々多くの刺激を受けている。

現在、実習の対象となっているのはファントムと呼ばれる人間の口腔内を精密に再現した模型である。まだ実際の患者さんを診るわけではないが、この模型と向き合うだけで、これまではなかった緊張感が走る。目の前には、これまでの講義では触れる機会がなかった数多の歯科用器具が並んでいる。その一つひとつの形状や用途を確認するたびに、歯科分野の専門性の高さと、これまでの技術の発展を強く実感するとともに、これらを全て使いこなさなければならないというプレッシャーも感じた。

実習が始まったばかりの頃は、まさに苦勞の連続であった。器具の名前や細かな形状の差を覚えるだけでも一苦勞で、どれをどの場面で使うべきか判断するのも時間もかかった。前日に実習書を読み、手順を追って予習をしても、いざ実践となると全く勝手が違う。模型の顎の角度やミラーでの視認など、教科書には書かれていない細かな調整に手こずり、思うように作業が進まないことが多々あった。

特に、自分の思い描く通りの形に処置ができな

い時のもどかしさは大きく、心身ともにしんどさを感じることもあった。どれだけ準備をしても実際に手を動かしてみなければ分からない難しさを痛感した。

しかし、回数を重ねるにつれて扱いにくかった器具の感触に慣れ、操作に伴うストレスが少しずつ軽減されていくのを感じた。最も大きな変化は、これまで机上で学んできた知識が実際の処置という行動と一つに結びついてきたことである。「なぜこの角度で削るのか」「なぜこの器具を使うのか」といった知識が臨床現場を想定した動きの中で腑に落ちた時、言葉にできない喜びがあった。ただ覚えた知識が実践的な技術へと変わっていく過程は充実感がある。

また、実習環境における人間関係にも助けられている。自分一人では解決できない困難に当たった時、先生方や先輩方は非常に丁寧に指導してくださり、自分では気づけなかった癖や問題点を明確にしてくれる。まだ自分の技術は決して上手くなく、手際の悪さに落ち込むこともあるが、そうした周囲の支えがあるからこそ、前向きに取り組むことができている。

講義室で静かに教科書をめくっていた頃に比べ、実習は格段に刺激的である。実際に手を動かすことで初めて、歯科技術の習得がいかに繊細で困難な作業の積み重ねであるかを身をもって知ることができている。この難しさを実感することは将来、患者さんの口腔内を預かる責任の重さを知るための第一歩だと思っている。今のこの感覚を忘れず、一步ずつ着実に技術を磨いていきたいと考えている。

歯学部生の今

歯学部歯学科3年 末 永 蒼 空

私の歯学部での3年生後期の学生生活を振り返ると、これまでの大学生活の中でとりわけ密度が濃く、そして最も厳しい時期だったと感じている。今思えば、2年生や3年前期までは基礎系の学科目の講義が中心で、試験日が迫ってくる焦りと緊張感がありつつも、心身ともにわずかに余裕を持っていたように感じる。しかし後期に入ると、講義内容は一気に専門性を増し、歯学部生としての本番が始まったことを強烈に実感させられた。

例えば、齶蝕学や顎口腔機能学といった、歯科における臨床的な講義が始まり、試験の内容もより歯学部らしくなったことを鮮明に覚えている。その一方で、これまでと大きく異なる点は、やはり実習の存在である。保存修復学や歯冠修復学、歯の形態学といった実習科目がはじまり、3年後期ではこれらの科目がひと際、大きな存在感を放っていた。

実習では、歯科医療に必要な繊細さと厳しさを、身をもって知る時間だった。模型や図で理解したつもりになっていた歯の形態も、実際に再現しようとしても、その複雑さや手技の困難さに何度も悩まされた。

とりわけ歯冠修復学の実習では、わずかな形成量や角度の違いが後々の工程に大きな影響を及ぼし、結果を大きく左右してしまう。毎時間自分の未熟さによる失敗を経験し、自分の至らなさをひどく痛感した。実習書の通りに進めているつもり

でも、実際に自分の行っている作業の意義を理解できているのか、上手に行えているかなどの疑問がふと浮かび上がり、不安に駆られてしまうことも多い。その不安を抱いたまま作業を進めていくと、過去の自分のミスが重なり、不安が現実となって模型上に表れてしまう。これは数秒という短いスパンで起きることもあれば、回をまたいで発覚することも多く、歯科医療では一つひとつの操作に意味があり、妥協は許されないのだと気を引き締めた。その度にうまくいかなかった理由を分析し、改善に努めることを繰り返した。この積み重ねこそが、将来臨床に立つための確かな土台になるのだと感じている。

さらに、3年生後期は時間の使い方の重要性を強く意識するようになった時期でもある。限られた時間の中で、講義、実習、試験対策をこなすには、優先順位を考えながら行動しなければならなかった。無駄な時間を減らし、短時間でも集中して取り組む工夫をするようになったことは、今後の学生生活だけでなく、社会に出てからも役立つ力になると感じている。

今、こうして振り返ると、歯学部3年生後期は、私にとって大きな成長の期間だったと思う。厳しい経験を通して覚悟が生まれ、歯科医師を目指す気持ちがより明確になった。これまでの自分の甘さを打ち壊し、培った忍耐力や努力する姿勢は、今後の臨床実習や国家試験に向けた大切な土台になるのだと確信している。過去の努力が現在の自分を支え、現在の積み重ねが未来を形づくる。その連なりを意識しながら、これからも一歩ずつ前に進んでいきたいと思う。

2025年を振り返って

歯学科4年 黒米 船斗

今回は、歯学科4年生の後期の様子と私の大学生活についてご紹介したいと思います。

後期は前期までの授業に比べ、実習が一気に増えました。前期以前は、一週間のうち1~2つだったのですが、後期に入ると12月までに4つに増え、そして、1月からは5つの実習に取り組むこととなります。また、これまでほとんどなかった5限まで授業のある日が多い週で4回に増えました。5限の終わる時間が18時なので、遅い日ですとその時間まで学校にいる日も増え、私たちは気が付くと1週間が終わっているような目まぐるしくも充実した学校生活を送っています。実習を行うにあたり、私たちは実習書や動画を見て、事前に予習をしてから実習に臨んでいます。実習書や動画では簡単そうに行っているように見えるものでも、いざ自分でやってみると意外と思った通りにできないことがたくさんあり、実際にやってみるものの難しさを日々感じています。そんな中で、実習物を失敗してやり直しになったり、心が折れそうになったりしても、私たちはそれにめげずに頑張ってお実習に取り組んでいます。現在行っている実習の中で、一昔前にはなかった新しい取り組みを行っている実習があります。それは、部分床義歯実習内のCAD/CAMの実習です。この実習ではRPIクラスプをパソコンで設計しました。それぞれの箇所の高みや幅を数値としてみることができたり、修正を容易に行うことができたりして、まだ感覚的にワックスアップしたものが適切な高さになっているか判断がつかない私にとって、非常に便利なツールであると感じまし

た。私たちは後期の初めに技工所見学に行っています。そこでも、CAD/CAMは主力として用いられており、私たちの世代が歯科医師として働く頃には、身に付けておかないといけない技術であると強く実感しています。

さて、私事ですが去年はコロナ禍にできなかった青春を取り戻す1年でもありました。私は中高とラグビーをやっていたのですが、高2の時はコロナでほとんど活動ができず、高3の5月で引退してしまっただけで、高校では不完全燃焼で部活を終えていました。そのため大学でまたできればうれしいなと思っていたのですが、新潟大学の歯学部にはラグビー部はなく（あった頃の先輩方が羨ましい限りです笑）、歯学部の他の部活に所属しました。所属した歯学部の部活では先輩や同期、後輩に恵まれ、楽しく活動していたのですが、心のどこかでラグビーをしたいという気持ちがくすぶっていました。そんな折、縁あって医学部のラグビー部の活動に昨年参加することになりました。今は自分ひとりでは成せない集の力の魅力をかみしめつつ、高校時代の分まで楽しんでます。そんなこんなで、部活2つにバイト、そして勉強とハードな1年でしたがとても充実した1年でした。

最後に私たちは今年7月にCBTとOSCEを控えています。これを無事通ると、いよいよ臨床実習です。臨床実習では、実際の患者さんを担当することになるので今から気が引き締まります。そして、我々4年生は国家試験でこのまま全員合格すると6か年ストレートの合格率が87.5%になる学年です。学年一丸となり、お互い切磋琢磨、協力しあいながら、今後とも勉学に励んでいきたいと思っています。

歯学部生の今

歯学科4年 山田佳奈

この度、歯学部ニュースの執筆を担当いたします。歯学科4年の山田佳奈です。ソフトテニス部に所属しています。講義に実習に課題、そして部活動に追われる毎日で、気がつけば大学生活4年目ということで時間の早さに驚かされます。今回は、長いようで短かったこれまでの学生生活を振り返ってみたいと思います。

まず1年生から3年生までは、とにかく試験の多さが印象に残っています。大学生活に慣れないうちから大量の試験に臨むことは大変ではありましたが、その分、努力を積み重ねる力が身についた時期でもありました。

3年生後期から4年生前期ではう蝕学、口腔外科学、小児歯科と矯正歯科からなる成長発育学など歯科に特化した科目が増え、実際の患者さんの症例写真を目にする機会も多くなりました。歯科医師を志す実感が少しずつ湧いてきたのも、この頃です。5月に行われた運動会では、4年生の持ち前の真面目さと協調性が発揮され、総合2位という結果を得られました。私は毎年、大縄跳びとリレーに出場しています。夏休みには、暑さで知られる熊谷でデンタルが開催されました。試合も他大学との交流も大いに楽しむことができました。私自身、このデンタルをもって部活動を引退しましたが、想像以上にはまり、辞めずに最後まで続けられたことに自分でも驚いています。

現在執筆している4年生後期は、歯周病学、歯科矯正学、歯内療法学、欠損補綴学など、週4日実習が続く非常に忙しい日々です。私は実技が得意とはいえず、進度も遅めで、技工物もまだまだ改善の余地が大きいと感じています。それでも先生方が丁寧に指導くださり、疑問にも納得のいくまで説明して下さるおかげで、少しずつ成長している実感があります。まだまだできないことは多いですが、ひとつひとつできることを増やしていけるよう、これからもがんばってまいります。

これから雪の季節を迎えます。県外出身の私にとって、雪が当たり前のように降る環境は、新潟に来て4年経った今でも不思議な感覚があります。雪が積もり道が凍ると、一歩踏み出すだけでも苦勞するほどで、その中で大学へ向かうのは簡単ではありません。それでも5年生でのCBTやOSCE、6年生での国家試験に合格し、歯科医師になるという目標のためがんばりたいと思います。



歯学部生の今

歯学科5年 溝口 宗一郎

歯学科5年生に在籍しております、溝口宗一郎と申します。この度「歯学部生の今」というテーマで原稿執筆のお話をいただきましたので、現在の学生生活について、ありのままをつらつらと書いていこうと思います。後輩の皆さんや、(もしかしたら)入学志望の皆さんの参考になれば幸いです。

現在5年生は臨床実習として、大学病院の歯科外来で、患者さんの治療や各診療科の見学を行っています。私が受験生だった頃、本学の面接試験で志望動機の一つとして挙げたのが、他ならぬこの臨床参加型の臨床実習です。当時は漠然と、「とにかく大学に合格して進級して、この実習に参加していれば自然と技能が身につくのだろう」という甘い考えでしたが、実際に10月から約3ヶ月間実習を経験してみて、ただ漫然と“そこにいる”だけでは身にならないのだなと感じます。まず前提として、この実習は受け持ち患者制、つまり年間を通して受け持つ患者さんが基本的に変わらないので、先輩から患者さんを引き継いだ時点で、治療部位が多くある患者さんを引き継いだ学生は忙しくなりますし、治療部位がほとんどない患者さんを引き継いだ学生はやる事が比較的になくなります。この時点で、学生によってかなり差が生じます。私は後者なのですが、こうした場合には各診療科の見学を主にすることになります。臨床実習では「ミニマム・リクワイアメント」という、修了に必要な最低要件が定められており、診療科ごとに「見学〇件、治療〇件」といっ

たような目標設定があります。これを達成するために、引き継ぎ時点で治療が少ない学生は見学を優先してスケジュールに組み込むこととなります(治療は新患の患者さんを待つか、他の学生の患者さんを部分的に担当する場合もあります)。見学とはいっても、いずれ歯科医師になった際にはその治療を自分ですることになるので、術者目線に立って、「なぜこの器具・材料を使っているのか」「処置の際、自分だったらどこに気をつけるか」といった疑問点や要点を考えながら見ていないと、ただ立っているだけになってしまいます。まさに、“見て学ぶ”姿勢が重要なのだと思います。

もちろん、治療に際しても主体的な学習が必要になります。治療前に当日の診療の流れや準備する器材などをまとめたレポートを提出したり、治療によっては模型上で支台歯形成や充填を練習した上で診療に臨むこととなります。私はCR充填やリライニングなど、比較的侵襲の少ない診療しかしていませんが、それでも緊張しましたし、疑問や不安を解消するためにも、治療前に予習しておくことの重要性を痛感しました。

ここまで偉そうに書いてきましたが、これはほとんど反省に基づいて書いています。見学の際にアシストで精一杯になってしまい、「質問ある?」と聞かれて答えに窮してしまったり、治療の際に器材の準備不足で何度も材料を取ってこないといけなかったりと、事あるごとに未熟さを痛感する毎日ですが、“学生さん”として手取り足取り教えていただける貴重な1年間を無駄にする事なく、より多くを吸収できる実習生活を送ってきたいです。

歯学部生の今

歯学科5年 相原礼奈

共用試験であるCBT・OSCEに無事合格し、臨床実習が始まってから早くも2か月が経ちました。このたび歯学部ニュースへ寄稿する貴重な機会をいただき、日々の臨床実習を振り返るとともに、今感じている思いを言葉にできることを大変ありがたく感じています。

新潟大学歯学部の臨床実習では、一口腔単位の実習として、約1年間にわたり数名の患者さんを担当します。各専門診療室から派遣される複数のインストラクターの先生方のご指導のもと、診療計画の立案から治療の実施までを経験し、これまで講義や基礎実習で学んできた知識が、実際の臨床と少しずつ結びついていくことを実感しています。

初めて診療に臨んだ日の緊張は、今でもはっきりと覚えています。患者さんを前にすると、理解しているつもりだった知識が思うように使えず、自分の未熟さを痛感する場面が多くありました。しかし、その一つ一つの経験が「もっと学ばなければならない」という気持ちにつながり、勉強への大きな原動力になっています。これまで学年全体で同じ課題に取り組んできた学生生活とは異なり、臨床実習ではそれぞれが自分自身の課題と向き合い、主体的に学んでいく姿勢が求められてい

ると感じています。

そのような中で、まだまだ未熟でひよっこの私たちに対し、インストラクターの先生方が根気強く、丁寧にご指導くださっていることには、感謝の気持ちしかありません。さらに、長い診療時間にもかかわらず、学習の機会を提供してくださる患者さんの存在なくして、私たちの臨床実習は成り立ちません。学生である私たちを信頼し、診療にご協力くださる患者さん一人ひとりに、心から感謝しています。

臨床実習が始まってから、特に強く感じているのが同期の存在の大きさです。分からないことを気兼ねなく相談でき、知識や資料を惜しみなく共有し合える57期の仲間がいるからこそ、不安や戸惑いの多い実習にも前向きに取り組むことができます。誰かが悩めば自然と支え合い、誰かが成長すれば自分のことのように喜べる関係は、これまでの5年間を共に過ごす中で培われてきた信頼だと思います。これからの1年間で、その絆はさらに深まっていくと感じています。

歯学部生活も残りわずかとなりましたが、今はこれまでの歯学部生活の中で最もやりがいと充実感を感じる日々を送っています。初診の際に感じたあの緊張感と、一つ一つの診療に真摯に向き合う今の気持ちを忘れることなく、同期とともに、残された歯学部生活を全力で駆け抜けていきたいと思っています。



著者は写真の一番右

歯学部生の今

口腔生命福祉学科1年 牛戸風歌

新潟大学に入学してから、あっという間に雪の降る季節になってしまいました。雪の中、受験会場まで歩いたあの日を懐かしく感じます。大学生になって初めての一人暮らしは、慣れない環境での生活に不安もありましたが、今では友達とお鍋パーティーをするなど新潟の冬を楽しんでいます。今回は前期に行われた実習と、私が所属している部活動についてお話しします。

まず初めに早期臨床実習についてです。名札を付け、白衣を着て病院に入るときはいつも、医療従事者であることを実感しました。病院見学では、実際に治療の様子を見たり、器具に触ったり多くのことを体験することができました。特に印象に残ったことは、患者役実習です。6年生の先輩に自分の歯を見てもらったこの実習では、医療従事者となる前にまず、患者さんのことを考える大切な機会となりました。次に何をされるのかわからない状態において、患者さんが怖いと感じる前に、患者さんに寄り添う声掛けが大切であることを学びました。また、実際にバキュームを使ったり、歯の状態を記録したり初めてのことに挑戦することができました。まだまだ慣れないことばかりでしたが、これから頑張っていきたいと思いました。

次に部活動についてです。私は現在陸上競技部に所属しています。今年の夏に佐渡島で行われたオールデンタルでは、総合優勝をすることができました。自分の専門種目以外の競技に出場したり、他大学の人と交流できたりたくさんの思い出を作ることができました。最後までバトンを繋ぎ走ったりリレーでは、先輩たちとたくさん練習した成果を発揮することができました。総合優勝が発

表されたときには、選手一人ひとりが頑張っただけではなく、支えてくれたマネージャーさんも含め、みんなで頑張ってきた結果でとてもうれしく、思わず飛び跳ねてしまいました。大きなトロフィーを囲み部員みんなで撮影した写真は私の宝物です。

最後に、この1年は多くの新しいことに挑戦することができ、多くの経験を自分のものにすることができました。友達と協力しながら取り組む課題や、高め合い励まし合う部活動も大変なことや辛いことも多いけれど、そのおかげでとても充実した大学生活を送ることができていると思います。来年はさらに専門分野が増え、忙しくなると思いますが、自分を成長させてくれる大切な機会だと思い取り組んでいきたいです。



「佐渡島オールデンタルにて」筆者は左から3番目

ロマンは外に、リアルは口内に

口腔生命福祉学科1年 田中奏早

新潟大学に入学してから気づけば半年以上が過ぎました。そして、この原稿を書いている12月5日——ついに新潟で今年初めての雪が降りました。新潟生まれで雪には慣れてはいるはずなのに、窓の外にひらひら舞い始めた雪を見た瞬間、“私の物語が始まる”気持ちになるのはなぜですかね。毎年見ているのにいまだに雪にロマンを感じてしまうのは地元民の初期設定なのかもしれませんね。それでは、興味の有無に関わらず、私の大学生活ストーリーをお届けします。なお、「ロマンは外に、リアルは口内に」というタイトルは、皆さんの目を引きたくて遊び心を込めてしまったため、本文とは関係ありません。でも、ほんの少しでも興味を持っていただけたなら作戦成功です。それでは、ここから真面目に1年を振り返ります。

私は新潟出身のため、慣れ親しんだ場所で大学生活を始めることができましたが、入学して感じた一番の変化は、全国から集まった多くの仲間との出会いでした。それぞれの歩んできた道、物事の捉え方の違いに触れるたび、自分の世界が一気に広がっていくのを感じます。その広がりをもより強く感じたのが、学部・学科を越えた人とのつながりです。授業や部活を通して医学部や歯学科の方々と関わる中で、前向きな姿や考え方に触れる機会が増えました。正直、尊敬する人が多すぎて毎日軽く反省会を開きます。尊敬に圧倒されて終わらせず、自分自身が胸を張れるように努力していきます。また、口腔生命福祉学科には少人数だからこそ深く関われる仲間がいます。皆が温かく、ユーモアがあって、夢に向かって努力している人たちです。同じ道を目指しながら支え合える仲間がいることに心から感謝しています。2年生からはより多くの時間を共にすることになると思いますが、この最高のメンバーとなら何でも乗り

越えられる気がします。どうぞよろしく申し上げます。

そして何より、学科の仲間をはじめ、学科を越えて出会ったすべての友達が、私の大学生活を最高にしてくれています。カラオケでランキング100位まで歌い切る謎の耐久戦を始めたり、何をするかはとりあえずじゃんけんで決めたり、将来の結婚時期を真剣に話し合ったり、食べ放題で元を取ろうとしすぎて体調を崩したり、もうよく何をしているのかわかりませんが、とにかく毎日楽しくてたまりません。

これらの最高な出会いに加えて、入学したばかりの時期に大きな学びを得る機会もありました。それは、早期臨床実習です。同じ班の仲間と一緒に様々な診療科を見学し、先生方から直接お話を伺うことができました。専門的な治療の現場を間近で見ること、これから自分もこういう学びをしていくのだと思い、興味がますます膨らみました。多くのことを学んだ実習でしたが、どの診療科でも共通していたのは、患者さんの不安に寄り添う姿勢が大切にされていたことです。口の中の治療は自分で見ることができないため、患者さんは不安を抱きやすいと思います。私も患者役実習の時に治療台に座った際、その不安を想像することができました。この実習を通して、患者さんに寄り添い、安心して治療を受けてもらえるような関わり方を大切にしたいと思いました。

2年生からは旭町キャンパスに移り、歯科医療の専門的な学びが本格的に始まります。将来、患者さんの健康を支える一員として、不安に寄り添い、信頼される歯科医療人を目指して、残りの大学生活を大切にしていきます。

最後になりますが、共に励む同期の皆さん、頼りになる先輩方、そして温かくご指導くださる先生方に感謝申し上げます。未熟な私ですが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。ロマンを胸に、リアルと向き合い、歯科の道を進んで参ります。意味の分からない伏線回収となりました。御清覧ありがとうございました。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科2年 青木結衣

旭町キャンパスへの通学にも慣れ、冬期休暇が近づいてきたころ、歯学部ニュース執筆の機会をいただきました。私は自身が受験生のとき、この「歯学部生の今」を読みながら大学生活への期待を膨らませていました。そのため、今度は私の文章が未来の歯学部生にとって、学びのモチベーションとなれば嬉しく思います。

現在、口腔生命福祉学科2年生は、座学での講義がほぼなく、相互実習やPBLを中心とした学校生活を送っています。今回の「歯学部生の今」では、医療系学部ならではの特色である相互実習について、主にお話したいと思います。相互実習では、学生同士で術者役と患者役を交代しながら、基本的な歯科衛生士の業務を練習しています。毎回の予習・復習や当番の仕事など、取り組むことが多く、最初は戸惑うこともありましたが、回数を重ねるうちに、徐々に計画的かつスムーズにできるようになりました。傷つけてしまわないかと震えながら探針で歯を擦過したことや、友人に口腔内を見られるのを恥ずかしく感じていたことが、今では懐かしく思い出されます。ある先生に通りすぎ「似合わないね」と言われたユニフォームも、今では少しずつ様になってきたのではないかと思います。

相互実習を通して、人間の口腔は想像以上に狭く、繊細な構造であることを実感しました。座学や動画で学ぶことと、実際に口腔内に触れることでは多くの違いがあり、相互実習では苦戦することも少なくありません。私は上手いかわないことがあるとすぐに落ち込んでしまう性格ですが、実

習を経て、「先生や友人からのアドバイスを受けられるようになった」という経験が積み重なり、それが自信につながりました。また、相互実習では細やかな声掛けなど患者役への配慮が欠かせず、技術だけでなく広い視野も求められます。こうした経験を通して、相互実習は私にとって人間的な成長の場にもなっていると感じます。

実習中は、先生方にご丁寧に指導いただきながら、学科の友人とコツを共有しあい、協力して取り組んでいます。2年生になり、PBLでのグループワークや、毎回ランダムに組まれるペアでの相互実習を通して、学科内のさまざまな学生と関わる機会が増えました。現在では、互いに声を掛け合い、意見や疑問を共有しやすい雰囲気学科全体に広がっていると感じます。他人の歯を扱うことにも慣れてきましたが、その慣れが重大な医療事故につながらないように、感染対策の実施を含め、常に緊張感をもって実習に臨んでいきたいと思っています。

「歯学部生の今」というテーマにちなみ、授業以外の話にも触れると、旭町キャンパスは新潟駅や古町に近いことが魅力の一つです。1年次に比べると確実に忙しくなり、歯学部生であることを実感したこの9か月間でしたが、空きコマに友人とキャンパス周辺のおしゃれな喫茶店を巡る時間が日々の活力となりました。こうした日常を重ねる中で、新潟大学歯学部を選んでよかったと改めて感じます。

3年生からは、新たな福祉学の学習に加え、臨床現場での実習も始まると聞き、忙しさを想像すると身の引き締まる思いです。これまで以上に高い意識を持ち、一つ一つの学びを大切にしながら過ごしたいと思っています。

口腔2年の今

口腔生命福祉学科2年 伊藤彩乃

口腔2年生となった私たちは、講義が中心だった前期とは異なり、後期から初めての相互実習や模型実習に取り組んでいます。ユニフォームを着て実習を行うようになり、歯科衛生士になるのだという実感がより一層湧いてきました。前期に講義で学んだ知識を実際の行動に移すことには、当初大きな緊張がありましたが、友人と励まし合いながら乗り越えることができたと思います。

まず、半年間の実習を通して学んだことについて述べます。毎回の実習では、先生方がデモンストラーションをしてくださいます。それを見て手順を理解することはできても、実際に自分でスケーリングやブラッシングを行ってみると、難しさを感じる場面が多くありました。私は処置に集中しすぎてしまい、自分のどこが悪く、なぜ上手くできないのかに気付けないことがよくあります。しかし、そういう時患者役の友人や担当の先生方からの指摘によって、自身の弱みに気付くことができ、とても感謝しています。

相互実習は、実際の患者さんに処置を行う練習であるだけでなく、歯科衛生士としての望ましい行動や望ましくない行動を互いに学ぶ機会でもあると、実習を通して感じました。実習前は、処置や患者さんへの指導内容についてばかり考えていましたが、声かけなどの患者さんへの配慮や、ユニットやライトのセッティングなど、注意すべき点が多くあることを学びました。今後は、実際の病院で患者さんに処置をさせていただく機会も増えていくため、常に相手は患者さんであることを忘れず、一つ一つの実習に真剣に取り組んでいきたいです。

また、私は1年生の頃から新潟大学管弦楽団に所属しています。中学生の頃から音楽を続けており、大学でも大人数で一つの音楽を作り上げる楽

しさを感じています。年に2回の大きな演奏会に向けて、合奏や個人練習を重ね、自分たちの力で演奏を完成させています。医療系学部だけでなく五十嵐キャンパスの学生も多く所属しているため、多様なコミュニティに参加することができ、コミュニケーションの幅も広がりました。さらに、会計やパートリーダーといった役職を任せていただき、学業だけでは得られない貴重な経験を積むことができています。

2年生を振り返ると、学業が忙しくなり、実習やテストに対する不安を抱える日々でしたが、友人と支え合いながら、部活動やアルバイトなど、さまざまなことに全力で取り組むことができた一年だったと思います。来年からは福祉の勉強も本格的に始まり、さらに不安を感じることもあるかもしれませんが、仲間を大切にしながら、これからも努力を続けていきたいです。



演奏会での1枚

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 田邊史歩

皆様いつもお世話になっております。この度は歯学部ニュースの執筆の機会をいただきましたので、3年生になってからの日々について紹介させていただきます。

後期に入り、社会福祉分野のPBLの時間が増えたことで、学びの内容だけでなく、人との関わり方にも変化がありました。PBLでは少人数で話し合いながら課題に取り組むため、これまであまり話す機会がなかった友人とも自然と会話を交わすようになりました。話し合いの合間には、好きなアイドルやドラマ、趣味などの話題も出るようになり、これまで知らなかった友人の一面を知ることができ、とても楽しく感じました。そのような交流を通して、クラスメイトとの距離が縮まり、仲を深めることができた点は、後期の学びにおいて特に良かったと感じております。

PBLでは、提示された課題に対して単に答えを導き出すのではなく、疑問を持ち、仮説を立て、課題として整理することが求められます。その過程において、普段の生活では疑問にも思わなかった事柄について調べ、考える機会が増えました。「なぜこの制度が必要なのか」「他にどのような支援方法が考えられるのか」といった視点を持つことで、自身の思考の幅が広がったと感じていま

す。

また、制度や支援について検討する際には、根拠となる法律から調べるようになりました。根拠法を確認することで、制度の内容だけでなく、その背景や目的、対象者の位置づけについても理解する必要があることを学びました。法律に基づいて考えることで、支援の意義や限界を意識しながら検討できるようになり、より深い学びにつながっていると感じております。

二月からは、社会福祉士としての臨床実習が始まります。実習先では障害のある方と関わる機会が多く、これまで日常的に接することのなかった方々との関わりに対し、不安や緊張を感じております。しかし、これまでの講義やPBLを通して学んできた「相手の立場に立って考える姿勢」や「丁寧に話を聴くことの大切さ」を意識しながら、一人ひとりと誠実に向き合っていきたいと考えております。

さらに、4年生からは本格的に臨床実習が始まります。これまで学んできたことを思い出し、実践に活かしていきたい気持ちはあるものの、自身の力不足を感じ、不安に思うことも多くあります。それでも、これまで積み重ねてきた学びを大切に、振り返りを行いながら、一步ずつ成長していきたいと考えております。今後も学び続ける姿勢を忘れず、学生生活と実習に真摯に取り組んでいきたいと思っております。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 高橋美桜

歯学部に入學してからすでに2年半が経ち、残す学生生活は1年半となりました。入學してから今日まであっという間に過ぎ、時の流れの速さに驚いております。今回、「歯学部生の今」というテーマのもと、3年生になってからの日々を振り返りたいと思います。

3年生になり、歯科の講義に加え、福祉分野の学習が本格的に始まりました。福祉の講義では保険のことや年金のことなど、内容は難しいものも多いですが、将来必ず役に立つ知識を学ぶことができ、とても充実しています。福祉の講義が始まったことなどから3年生はほとんど毎日1限から講義や実習が入っていたり、国家試験の過去問提出が毎月あったりと2年生の頃と比べて格段に忙しくなりました。時間に余裕のあった1年生や2年生の頃にアルバイトや勉強にもっと力をいれておけばよかったと、少し後悔することもあります。

また、10月からは新潟大学医歯学総合病院での臨床実習が始まりました。教科書で学んできた知識がどのように患者さんの診療に活かされているのかを間近で見ることができます。病院実習ではわからないことが多く、自分の知識不足を痛感しあたふたしてしまう場面もあります。しかし、病院で働く歯科衛生士や歯科医師の方々に支えていただきながら、歯科衛生士としての業務を学び、少しずつ成長できていることを実感しております。

す。そのたびに「もっと頑張ろう」という気持ちが湧いてきます。医療者としての立ち振る舞いや言葉遣いなど、臨床でしか学べない多くのことを経験することができとても充実した時間を過ごしています。午前の病院実習が終わると友人とのお昼ご飯の時間が待っています。最近はローソンの新商品をチェックすることが友人との間でのちょっとした楽しみです。友人とローソンで買ったお昼ご飯を食べながら今日の実習の話やささいな世間話をして過ごすお昼の時間はとても楽しくて日々の活力となっています。

私が所属している管弦楽団では12月に定期演奏会としてリューとぴあにて演奏を行いました。チャイコフスキー交響曲第6番の演奏が終わった後、達成感と感動で胸がいっぱいになりました。3年生である私はこの演奏会をもって現役回生は終わりとなり、今後はより一層学業に励む時間が増えました。私はこの部活動で初めてチェロという楽器に挑戦しました。新しいことに挑戦する楽しさや大勢の人と音楽を奏でる楽しさを知ることができ、とても貴重な経験であったと感じています。

4年生になると歯科、福祉の実習がさらに本格的に始まります。不安でいっぱいですが、クラスの仲間と励まし合いながら1日1日を大切に過ごしていきたいです。そして、歯科衛生士と社会福祉士のどちらでも活躍できるようなスキルを身につけたいと思います。また、残り少ない学生生活を後悔のないものにするため、学業にも日常生活にも全力で取り組み、思い切り楽しみたいです。

スイス・バーゼルでの研究滞在

口腔病理学分野 阿部 達也

2025年6月から11月までの半年間、スイスのバーゼル大学との共同研究を行うために現地滞在をしていました。その様子を少し共有したいと思います。

バーゼルはスイスの北部で、ドイツとフランスとの国境に接する都市です。街の中心部をライン川が流れており、夏は川で泳ぐ人も多くみられます。ロシュやノバルティスといった巨大製薬メーカーの本社が存在しており、産業も充実しています。

共同研究を行っている研究室は、バーゼル大学・バーゼル大学病院のComputational and Translational Pathology Lab (Prof. Viktor Kölzer) で、病理医を筆頭に、computer scienceやbioinformaticsを専門とするメンバーが、病理画像解析を軸に研究を行っています。今回、幸運にもSwiss National Science Foundationに研究計画が採択され、現地での研究滞在を行うことができました。

滞在中は、大学の研究施設 (Department of Bioengineering) と、病院の病理部門の二拠点を行ったり来たりしていました。特に前者の施設は、スタンディングデスクにウルトラワイドモニターを完備したオープンスペースを自由に使用でき、生体組織・人工材料の3Dプリンティングや一般的なウェットラボも有する非常に先進的かつ快適な施設でした。病院の病理部門は、病院に併設された施設で、ここでは病理診断のほか病理検体を用いた研究などを行っています。巨大なバーチャルスライドスキャナーが診断用に稼働しているほか、研究用にさらに複数のスライドスキャナーを使用しており、膨大なデータを管理してい

ます。もちろん遺伝子解析などの設備も充実しています。

これらの施設で主に、現在の自分のテーマである頭頸部扁平上皮癌におけるmRNAプライミングバリエーションの病理学的意義の検討のためのデータ解析と、バーゼル大学病院での症例データ収集・病理標本の顕微鏡上での評価などを行っていました。機械学習を用いた病理画像解析は最近のトピックではありますが、これを実現するためには、人力でのデータ収集や病理学的評価項目の記録はまだ不可欠で、地道な顕微鏡での病理学評価が必要です。実際に現地に滞在してこれらの作業を完了できたことは、今後の研究推進に大きな意義のあるものでした。

今回の滞在中では、さまざまな面で、日本とスイス・ヨーロッパの環境・経済・教育・仕事への考え方の違いといったものを痛感しました。紙面の都合で詳細は省きますが、どちらにもいい面があれば悪い面もあります。いずれの経験も生かして、より視野の広い研究・診断・教育活動を実践していければと思っています。



ライン川を臨むバーゼルの街並み

FD講演会について

1. OA義務化

令和7年9月24日(水)に、学術論文のオープンアクセス(OA)義務化に関するオンラインFD講演会が開催されました。来年度より開始されるOA即時義務化に対する新潟大学の対応やAPC支援に関して理解するための講演会として、「新潟大学における即時オープンアクセス対応」と題して学術情報部学術情報管理課オープンアクセス係の藤原幸生先生、「ゴールドOAで公開する場合の本学のAPC支援について」と題して学術情報部学術情報管理課オープンアクセス係金子垂寿沙係長からご講演いただきました。

2. 色覚への配慮

令和8年1月15日(木)に、東京慈恵会医科大学解剖学講座教授 岡部正隆先生を講師として、「色が違って見える世界をつなぐ」と題した対面でのFD講演会が開催されました。色覚の問題を日常生活、臨床、研究の場でどのように配慮すべ

きかについて、専門的見地から分かりやすくご講演いただきました。

いずれの講演会ともに参加者からは多くの質問やコメントが寄せられ、大変有意義なFD講演会となりました。



令和8年1月15日FD講演会の様子

スリランカ・ペラデニア大学Sajjiv Ariyasinghe教授の表敬訪問について

新潟大学では、国際交流・連携に顕著な貢献を頂いている方々に「新潟大学リエゾンプロフェッサー」の称号を付与し、国際ネットワークの構築・推進に協力頂いています。令和7年10月20日(月)に、新潟市内のホテルにて「第3回リエゾンプロフェッサー・アセンブリー」を開催しました。特に卓越した活動実績を有する、ペラデニア大(スリランカ)のサジブ・アリヤシンヘ教授らを招聘し、それぞれの国際交流・研究連携の取り

組みについて報告が行われました。各発表では、本学との学生交流や共同研究の成果に加え、今後の国際連携の展望に関する具体的な提案も示されました。アリヤシンヘ教授は、新潟大学歯学研究科(当時)を修了後、長きにわたりペラデニア大学と新潟大学との学生交流に貢献されています。アセンブリー終了後には歯学部にも表敬訪問して、両大学のさらなる交流についての議論がなされました。

新潟大学歯学部 創立60周年記念事業について

歯学部は令和7年に創立60周年を迎え、これを記念して11月1日（土）、新潟市中央区のホテルオークラ新潟にて「創立60周年記念事業」を開催し、市民フォーラム、講演会、祝賀式典、展示コーナーなど多彩なプログラムが行われました。

市民フォーラムでは、フリーアナウンサーの伊勢みずほ氏より、「がんと向き合う日々でも、笑顔をあきらめないために」と題して、ご自身の闘病経験をもとにお話をいただきました。続いて、「健康を通じて支え合う地域社会」をテーマにパネルディスカッションが行われ、濃野要 歯学部教授の司会進行のもと、伊勢様、新潟県歯科医師会会長松崎正樹先生、井上誠歯学部長が登壇し、地域における歯科医療の役割や、健康と笑顔を守るための取り組みについて多角的な視点から意見が交わされました。続く講演会では、「歯学部の現状と展望」をテーマに、大学病院歯科の現状と展望（歯周診断・再建学分野 多部田康一教授）、歯学教育の現状と展望（歯科臨床教育学分野 藤

井規孝教授）、口腔生命福祉学科の現状と展望（口腔生命福祉学科 濃野要教授）、国際交流活動の現状と展望（予防歯科学分野 小川祐司教授）から、歯学部のこれまでの歩みと今後の展望について紹介があり、参加者は歯学部の多様な取り組みに理解を深めました。

祝賀式典では、牛木辰男 新潟大学学長、高田淳子 厚生労働省医政局歯科保健課歯科口腔保健推進室室長、花角英世 新潟県知事（代読中村洋心 新潟県福祉保健部長）、高橋英登 日本歯科医師会会長、松崎正樹 新潟県歯科医師会会長の祝辞に加えて、海外の協定校から寄せられたお祝いメッセージ動画が上映され、国際的な交流の広がりを感じるひとときとなりました。隣りの会場内では、歯学部各分野の教育・研究・診療活動を紹介するパネル展示が行われ、来場者は歯学部の歩みと未来への取り組みを知る機会となりました。



パネルディスカッション



パネル展示の様子

令和7年度臨床実習生（歯学）認定証授与式および臨床実習登院式の実施について

令和7年10月10日（金）に、臨床実習生（歯学）認定証授与式を行いました。本認定証は、昨年度から公的化された臨床実習を開始する前の共用試験（CBT及びOSCE）に合格し、本学が定めた必修単位のすべてを取得することによって診療参加型臨床実習に進むために必要な知識及び技能を有していることが認められた歯学生に授与されます。今年度は歯学科5年次の学生43名が臨床実習生に認定されました。授与式では、井上誠歯学部長から訓示があり、「入学後に身に着けた知識・技術をもとに、自信を持って臨床実習に臨んでください」と学生たちに期待の言葉が送られました。その後、代表学生からは、「感謝の気持ちを忘れず、より多くのことを学び、経験できる臨床実習にすることを誓います」と決意が宣誓さ

れ、井上学部長から代表学生に臨床実習生（歯学）認定証及びネーム刺繍の入った診療衣が授与されました。また授与式に引き続いて臨床実習登院式が行われました。



臨床実習登院式での学生の決意表明

教授人事について

令和6年3月末で退職された小林正治先生（組織再建口腔外科学分野）、魚島勝美先生（生体歯科補綴学分野）、令和7年5月末で退職された瀬尾憲司先生（歯科麻酔学分野）の後任として、令

和7年12月1日（月）に岸本直隆先生（歯科麻酔学分野）、小野重弘先生（組織再建口腔外科学分野）、令和8年1月1日（木）に藤井規孝先生（生体歯科補綴学分野）が着任されました。

2025年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」について

今年度歯学部から申請していた標記プログラム「食の健康を守る新世代口腔ヘルスプロモーションリーダー養成プログラム」（対象国東南アジア、定員8名）が採択されました。これで、昨年度採

択の「生涯の「食べる」を支える口腔医療コンダクター養成プログラム」（対象国南西アジア、定員3名）を加えて、令和8年にはさらに多くの留学生を迎えることとなります。本プログラムの実

施を通して、世界をリードする日本における高齢者歯科医療の核となる摂食機能と食に関する異分野融合研究、改めて重要視されている感染症対策と口腔衛生の相互関係の解明を目指した臨床研

究、再生医療に関連する先端臨床・研究を通して、これらを母国で実践できる新世代を担う口腔医療人材育成を養成するミッションを果たしていくこととなります。

令和7年度学長裁量ポイント (スイングバイプログラム) について

歯学系への配分予定であった生体制御学分野の齋藤瑠郁先生の採用が認められました。



教授に就任して

新潟大学大学院医歯学総合研究科 組織再建口腔外科学分野教授に就任して

新潟大学大学院医歯学総合研究科
組織再建口腔外科学分野 小野重弘



このたび、令和7年12月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科組織再建口腔外科学分野の教授を拝命いたしました小野重弘と申します。身に余る光栄とともに、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。このようなご挨拶の機会を賜りましたこと、まずは心より御礼申し上げます。

私は佐賀県出身の九州男児でございます。高校・予備校時代までを九州で過ごし、1992年に広島大学歯学部に入學いたしました。学生時代は硬式庭球部に所属し、ほぼ毎日、仲間とコートに立つ日々を送っておりました。全日本歯科学学生総合体育大会、いわゆるオールデンタルでは、チームメイトにも恵まれ、団体3位という成績を収めることができました。当時の大会会場は軽井沢で、宿舎は「ふじみ荘」でした。そこが6年間にわたり、新潟大学歯学部硬式庭球部の皆さんと同じであったことを、今でもよく覚えております。四半世紀以上の時を経て、その新潟大学で教室をお預かりすることになり、不思議なご縁とささやかな運命のようなものを感じております。

1998年に広島大学歯学部を卒業し、同歯学部28期生となりました。新潟大学とは学部設立が同じ年であるため、この点は自己紹介の折にたびたび話題にさせていただいております。大学卒業後は口腔外科学第二講座の大学院に進学し、直ちに広島大学医学部第一病理学教室において、消化管の

分子病理学を基盤とした研究に従事いたしました。研究・教育に加え、膨大な病理診断業務を担う第一病理の一員として、諸先生方から研究者としての姿勢や大学人としての在り方を、厳しく、かつ温かくご指導いただきました。その後、第一病理で得られた知見を口腔癌の研究へと応用し、博士（歯学）の学位を取得いたしました。学位取得後は広島大学病院において臨床研修を行い、口腔外科医としての第一歩を踏み出しました。

母講座である広島大学大学院口腔外科学教室に復帰してからは、抜歯や炎症性疾患といった一般的な口腔外科疾患から、顎顔面外傷、顎変形症、口腔癌および顎骨再建、顎関節疾患、インプラント治療に至るまで、幅広い症例に携わってまいりました。大学病院として多くの紹介患者さんを受け入れる中で、各診療科や関連病院との連携の重要性を日々実感しつつ、チーム医療の一員として診療に従事してきました。2011年にはドイツ・ハノーファー医科大学口腔顎顔面外科学教室に臨床留学する機会を頂き、顎顔面領域における先進的な外科治療やチーム医療の在り方を学ぶ、かけがえのない経験を得ることができました。帰国後は外科矯正治療に軸足を置き、全国の第一線でご活躍の先生方のご指導を賜りながら、口腔外科専門医・指導医、国際口腔顎顔面外科専門医の資格を取得し、今日に至っております。

私どもの組織再建口腔外科学分野は、歯学部創設期から続く伝統ある教室であり、顎変形症、腫瘍、口唇口蓋裂、顎顔面外傷、閉塞性睡眠時無呼吸症、インプラント関連の骨造成など、多岐にわたる顎顔面疾患を対象として診療と研究を行ってきました。とりわけ矯正歯科と連携した外科的矯正治療においては、本邦有数の症例数と実績を有し、歴史と伝統を誇る外科矯正治療の拠点の一つであると自負しております。この伝統ある分野をさらに発展させるべく、教室員一同、力を合わせて研鑽を重ねてまいりたいと思います。

新潟での生活はまだ始まったばかりですが、日本海と信濃川が作り出す風景、新潟ならではの文化や人の温かさに、日々新鮮な刺激を受けております。日本海側の広い医療圏を担う大学として、多様な地域から患者さんを診察・治療することは、大きな責任であると同時に、新たな学びの機会でもあると感じております。

今後の抱負としては、第一に診療面では、顎変形症、腫瘍、口唇口蓋裂、外傷、睡眠時無呼吸症など、従来から本教室が強みとしてきた領域を一層充実させてまいります。そのうえで、医科系・歯科系各診療科、市中病院歯科口腔外科、一般歯科医院、矯正歯科、歯科麻酔科、看護部、リハビリテーション部門などとの連携をさらに深め、安全で質の高い医療を安定して提供できる体制の維持・発展に努めていきたいと考えております。

第二に研究面では、これまで本教室で推進されてきた再生医療や顎変形症、口腔癌、睡眠時無呼吸症などに関する基礎・臨床研究を大切にしつつ、三次元画像解析やデジタル技術、機能評価法なども積極的に取り入れ、形態変化と機能変化を客観的に捉える視点をいっそう強化していきたいと考えております。将来的には、国内外の研究機関とも連携しながら、新潟大学発の臨床研究成果を世界に向けて発信できるよう、教室員とともに一歩一歩着実に歩みを進めてまいります。

第三に教育においては、全国的にいわれる「外科離れ」が指摘される中で、外科治療の魅力と責

任の大きさ、そして患者さんから学ぶことの大切さを、学生や若手歯科医師に丁寧に伝えていきたいと考えております。学生教育では、口腔外科の基礎知識と手技に加え、医療安全、倫理、多職種連携といった視点も含めて、総合的な臨床能力を育むことを目標とし、研修医・大学院生教育では、確かな専門性と豊かな人間性を併せ持つ口腔外科専門医の育成をめざしてまいります。その過程において、自らが口腔外科医として学び、支えていただいた経験を活かしつつ、一人ひとりの成長に寄り添う教育を心がけていきたいと存じます。

これまで長年にわたり身を置いた広島から、日本海側の新潟へと拠点を移すことは、大きな環境の変化ではありますが、広島大学で培った経験と、新潟大学組織再建口腔外科学分野の伝統を融合させながら、教室員と力を合わせて、新潟大学歯学部および地域医療、口腔外科医療の発展に微力ながら貢献していきたいと考えております。これまでお世話になりました諸先生方への感謝の気持ちを決して忘れることなく、新たな環境で一から学び直す覚悟で、日々診療・教育・研究に向き合っていく所存です。

末筆ながら、組織再建口腔外科学分野および口腔再建外科に関わるすべての先生方に、あらためて深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

部活動紹介

歯学部硬式庭球部

歯学科1年 吉田成穂

みなさんこんにちは。歯学部硬式庭球部主将の吉田成穂です。

私たちは現在、旭町キャンパス内のテニスコートで、水曜日17時から19時、土曜日13時から15時までの週2回活動しています。12月から3月末までは雪の影響でオフ期間となるため、勉強やアルバイトなど自分の時間と両立しやすい部活です。楽しくテニスをするのはもちろんのこと、歯学部体育系の部活にとって大きな大会である「デンタル」に向けて、日々練習に励んでいます。

1年生の私から見た歯学部硬式庭球部の魅力は、まず部活の雰囲気 genuinely 良いです。面白くて優しい先輩ばかりで、常に明るい雰囲気で活動しています。

さらに、OB・OGの先生方がOB会だけでなく普段の練習にも参加してくださり、丁寧にテニスを指導してくださいます。アドバイスしていただくたびに上達を実感し、よりテニスが楽しくなっています。

そして、テニスそのものもとても楽しいです。一緒にテニス部の体験をしたテニス初心者の友人も「楽しい!」と言って何度も参加していました。

最も大きい行事は8月にあるデンタルです。約5泊6日の遠征で千葉の白子町で毎年行われます。先輩や同級生とも親睦が深められ、日々のテニスの練習の成果を発揮できる場です。

2025年度の「デンタル」では女子が8位入賞を果たしました。部員が全身をつったり、レンタカーがパンクしたりなどなどハプニングも多くあ

りましたが、みんなで笑いながら乗り越えました。楽しく合宿をしてさらに良い結果も残せた思い出深い大会となりました。

こんなに楽しいのになぜ部員が少ないのかと思われる方もいると思います。テニス部に入らない理由の中に「テニス部は暑そう、日焼けしそう」という声をよく聞きますが、帽子や手袋、日焼け止めなどの対策でそんなに焼けなくて済みます。多分。こんなデメリットが気にならないほど、歯学部硬式庭球部は楽しい部活です。

そして「テニス自体を始めるのにハードルが高い」という声もあります。それは全く問題ありません。運動できる服と靴さえあれば大丈夫です。一度体験に来てみるとそうでもないことがわかるはず!

現在の部員数は男子3名、女子6名の計9名(2026年1月現在)と少人数です。そのため、昨年度は男子がデンタルに出場できず、女子も先輩方の引退により今年度の出場人数がギリギリの状況です。そこで、硬式庭球部では新入部員を切実に募集しています。新入生はもちろん、2年生以上の方も大歓迎です。ガッツリテニスをやりたいという方、共にデンタルで上を目指しましょう! 硬式テニスの経験がない人も大々大歓迎です! テニス未経験者や、軟式テニス経験者も在籍しています。新歓期間に限らず、年間を通して体験者を募集しています。ラケットの貸し出しも行っていきますので、運動できる服装で気軽に体験に来てください。お待ちしております!!

歯学部サッカー部

歯学科3年 藤川 悌也

あけましておめでとうございます。新潟大学歯学部サッカー部主将の藤川悌也です。私たちの部は現在プレイヤー16名、マネージャー2名の計18名で活動しており、学業と部活動を両立しながら日々サッカーに取り組んでいます。普段の練習は月曜日と水曜日の18時から20時、土曜日は13時から15時まで旭町グラウンドで行っています。授業や実習で忙しい時期もありますが、限られた時間を有効に使って基礎技術の反復や戦術の確認を行っています。

夏の大会が近づくと、練習試合を多めに組んで実戦感覚を養うようにしています。毎年5月下旬から6月上旬に開催される北日本医科学生体育大会と、今年は愛知で開催されるオールデンタルが私たちにとっての大きな目標です。これらの大会で上位を目指すため、個々の技術向上だけでなくチームとしての連携やメンタル面の強化にも力を入れています。

昨年は初開催となった北日本デンタルでは、優勝という大きな結果を残すことができました。部員一同その経験を糧に、課題や反省点を吟味し高い目標に挑戦しています。寒さに負けず、雪上でも勝利をもぎ取ったという経験はより一層部員の絆を深められたと思います。先輩方や運営・企画をし、支えてくれた関係者への感謝を忘れず、謙虚に、しかし貪欲に高みを目指して挑戦を続けてまいります。

部の雰囲気は和やかで、練習後には先輩後輩の垣根を越えて相談、談笑し合う場が自然と生まれ

ます。マネージャーは練習の準備や記録、遠征時のサポートなど多岐にわたる役割を担っており、彼女たちの支えがあってこそ安心してプレーに集中できます。また、学内外の交流・練習試合を通じて他大学の選手と切磋琢磨する機会も多く、技術面だけでなく人間関係やコミュニケーション能力の向上にもつながっています。

私たちは勝利を目指す一方で、限られた人数での活動のため安全管理や怪我の予防にも配慮し、トレーニング前後のストレッチやコンディショニングを行っています。

部活動を通して得られる仲間との絆や達成感は、学生生活の大きな財産だと感じています。これからも練習を重ね、北日本医学生体育大会やオールデンタルで良い成績を残せるようチーム一丸となって努力してまいります。



北日本デンタル優勝後に取った集合写真

早期臨床実習を終えて

歯学部歯学科1年 河合美奈

歯学部に入學して間もないにも関わらず、歯学への知識は全くない私たちに将来の在るべき歯科医師像を示してくれた早期臨床実習。私はこれまで自分が将来、どのような歯科医師となり、どこで働き、どのようにして医療分野に貢献したいかが明確な理想が見えませんでした。しかし私は早期臨床実習という歯学の本格的な知識を得たり、実際の現場を見学できたりする貴重な機会を通して自分と向き合い、将来歯科医師として自分がどう在るべきなのかを考えることができました。また、入學して9か月が経とうとしている今、自分とは異なる人生観や価値観を持つ同輩や先輩、先生方と関わってみて将来の歯科医師として、人間として尊敬できる人達にたくさん出会いました。私は年上の人と話すことや大勢の人の前で話すことが苦手でしたが色々な人との会話を通して歯科医師として必要な様々な場面でのコミュニケーション能力が身についたように思います。さらに関わりがある人達の影響でこれまで悲観的で物事を前向きに捉えられなかった性格も以前よりはポジティブに捉えられるようになったり、周囲にも気配りができる余裕が生まれたり、大学生になってから人間としてたくさん成長できたと思っています。早期臨床実習や部活動という場では、診療科が多岐にわたっているということや将来的に歯科医師の人手不足に陥ってしまうということなど専門的なことから表立っていない現状までたくさんを知りました。また、患者役実習では実際に患者という立場になってみて初めて、歯科治療という恐怖感を拭うことの難しさや患者に歯の状態を正確に伝えることの難しさなど歯科医師に求められることが目に見えて分かりました。早期臨床実習を終えてたくさんの知識と経験と成長を得た今、歯科医師になることに自覚を持ち始めることができました。将来の歯科医師像を達成する

ために今の自分に満足せず、積極的に学び続ける姿勢でいたいです。

歯学部歯学科1年 会田優仁

早期臨床実習Ⅰ・Ⅱは、一年次に歯科医療の現場に直接触れることのできる非常に貴重な機会でした。多くの診療科での見学や実体験を通じて、将来の歯科医師としての在り方や、医療従事者に求められる多角的な視点を深く学ぶことができました。

実習の中で特に強く感じたのは、患者さんの視点に立つことの難しさと、そこに寄り添うコミュニケーションの重要性です。車椅子実習では、実際に乗車することで、健常者が気にも留めない床の小さな凹凸や勾配のゆるい坂が、患者さんには強い振動や恐怖として伝わることを身をもって知りました。また、先生方が患者さんの年齢などに応じて対応を工夫し、患者さんに寄り添う様子も見学できました。これらの体験から、歯科医師に必要なのは高度な治療技術だけではなく、患者さんの心身の負担を想像し、言葉をかけ、不安を取り除く対話力であると痛感しました。

また、各診療科の見学を通じて、歯科医療が単に歯を治すことにとどまらず、患者さんの全身の健康やQOLを支える基盤であることも学びました。歯周病科で学んだ糖尿病などの全身疾患との深い関連性や、小児歯科や義歯診療科で見た、生涯にわたって「食べる」「話す」機能を守るための長期的な治療計画などを目の当たりにし、口の健康の重要性を痛感しました。

そして、こうした多岐にわたる配慮や高度な専門治療は、歯科医師一人で完結するものではなく、予防歯科から外科処置に至るまで、多職種が連携し、それぞれの専門性を発揮して患者さんを支えるチーム医療の現場に触れ、その重要性を学

びました。

歯科医師には技術、協調性、コミュニケーション力など多様な視点が求められていることを実習を通じて改めて強く実感しました。

最後になりますが、お忙しい中ご指導くださった先生方、実習に協力してくださった患者様、先輩方に心より感謝申し上げます。この実習で得た大きな気づきを大切に、今後の学業に一層精進していきたいと思えます。

口腔生命福祉学科1年 多賀谷 歩 楓

新潟での新生活が始まった4月、期待よりも大きな不安を抱え、歯科医療の世界に足を踏み入れました。4か月間の早期臨床実習を通して、歯科医療の意義を再確認することができました。実際に現場で患者さんと向き合う歯科医師や歯科衛生士の方々の姿に触れ、将来歯科衛生士として貢献したいという気持ちは、より明確なものになりました。

実習で行われたグループ討議で、私たちのグループは「嚥下」をテーマに考えを深めました。私は「嚥下」と聞いて、今まで「飲み込む動作」という単純なイメージしか持っていませんでしたが、グループ討議を通して、生活の質に直結するとても重要な機能であることを学びました。口腔内を清潔に保つことだけでなく、患者さんの食べる力そのものを守ることも、歯科衛生士の大切な役割だと深く理解することができました。

口腔リハビリテーション科の見学では、嚥下障害を持つ患者が使用している「とろみ水」を試飲しました。無味無臭で飲み続けることが簡単ではなく、この体験によって、患者さんが抱える日常的な苦痛や、水分補給が難しくなることで起こる脱水症状のリスクを身をもって実感しました。

また、診療室では歯科医師や歯科衛生士が患者さんの姿勢や顔の向きまで細かく調整し、安全面を意識しながら治療を行う様子を見ることができました。このような対応は、治療を円滑に進めているだけではなく、患者さんの安心感にもつながっていると感じました。また、それぞれの診療

科に共通して、患者さんとのコミュニケーションを大切にして信頼関係を築いていることを学びました。

今回の実習を通して、歯科医療は治療だけでなく、人々の生活そのものを支える役割を担っていると感じました。将来は地域医療の一員として、患者さんに寄り添える歯科衛生士を目指したいと考えています。今回の実習で得たものを大切にして、これから始まる学びに前向きに取り組んでいきたいです。

口腔生命福祉学科2年 月 精 実 来

早期臨床実習では、歯科衛生士や社会福祉士が実際に活躍している4カ所の現場を見学し、講義だけでは得られない多くの学びを得ることができました。実際の支援や医療の現場を自分の目で見ることで、専門職として求められる役割や姿勢について理解を深めることができたと感じています。

特に印象に残っているのは児童相談所の施設見学です。

見学前は、児童相談所は虐待対応が中心の施設というイメージが強くありましたが、実際には子供の発達の悩みや不登校、非行など幅広い相談も受け付けており、子どもだけでなく、保護者にとっても頼れる支援機関であることを学びました。一時保護所では、子どもを保護するだけでなく、退所後の生活を見据えた支援が行われていました。日課やきまり、学習支援を通して自立や再出発を支えている点が印象的でした。一時保護所は、子どもたちの安心・安全を確保する場であると同時に、将来につながる力を育てる重要な役割を果たしていることを学びました。

新潟医療センターの見学では、病院における歯科衛生士の専門性と役割の重要性を学ぶことができました。病院では障害や全身疾患を持つ患者さんが多く、歯科医師と歯科衛生士が連携しながら、患者さん一人ひとりの全身状態を把握し、安全を最優先に治療を行っていました。また、整形外科やMST、STなど多種職と協働し、患者さん

の口腔機能の維持・向上を通して生活の質を支えている点から、多種職連携の大切さを実感しました。

今回の実習を通して、歯科衛生士は歯科医師の補助にとどまらず、専門性と自立性をもって患者さんに関わる専門職であること、社会福祉士は利用者本人だけでなく家族や関係職種との調節を行い、不安に寄り添う存在であることを学びました。両職種に共通して重要なのは、専門知識だけでなく相手の立場に立って関わる姿勢だと感じました。この経験を基に、今後の学習や実習に生かしていきたいです。

歯学科三年 鎌田 星 歌

3年生前期に、早期臨床実習Ⅱが行われました。私たち3年生にとって、病院で行う実習は、1年生の時に経験した早期臨床実習Ⅰ以来となります。2・3年生で基礎科目を学んだうえで行われたこの実習では、1年生の頃とは異なる視点から多くの学びを得ることができました。また、1つの診療科あたり3時間という十分な見学時間が設けられていたことで、各診療科についてより深く理解することができました。

この実習を通して特に印象的だったのは、すべての診療科が基礎科目と強く結びついているという点です。なかでも口腔外科では、その繋がりを強く実感しました。実際の画像を用いた症例説明に加え、良性腫瘍と悪性腫瘍の違いや神経系との関係などについて、質問を交えながら丁寧に解説していただきました。これにより、解剖学・組織学・病理学など、これまで学んできた基礎科目が臨床の現場でどのように活かされているのかを、より具体的に理解することができました。

1年生では診療科の概要を学び、2年生で基礎科目の知識を修得し、3年生で早期臨床実習Ⅱに臨むことで、初めて基礎と臨床の密接な関係性を実感できたと感じています。基礎科目を学習している段階では見えにくかった臨床との繋がりも、実際の診療や先生方のお話を通じて理解が深まりました。先生方が基礎科目の知識とこれまで培っ

てこられた技術をもとに患者さんの治療を行っている姿を拝見し、改めて尊敬の念を抱くとともに、日々の積み重ねの大切さを強く感じました。

本実習を通して、自身の知識不足や基礎科目同士の理解の浅さに気づくことができました。今後は、基礎科目が臨床の土台となっていることを意識しながら、日々の学習やこれからの実習に取り組んでいきたいと思えます。このような貴重な学びの機会を与えてくださった先生方や見学にご協力くださった患者さんにとっても感謝しています。ありがとうございました。

歯学科3年 五味 洵 成

まずはじめに私達学生のために、大切な時間を割いていただいた先生方にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思えます。

私は早期臨床実習を終えて、今まで勉強してきたことが歯科医療と密接に関係していることが分かった。今まで勉強してきたことがどのように歯科と関係しているかということが自分自身理解できておらず、どうしてこのような知識が必要なのかということについて疑問に思っていた。しかし、いざ病院で診療を見学させて頂いたり、先生方とお話させて頂くと、基礎科目の重要性を実感させられた。解剖学、生化学、生理学、薬理学といった科目は単体で存在するのではなく、それぞれが複雑に絡みあっており、それらを学習することで人間の構造や体の反応を理解し、臨床の現場に必要な知識となっていると感じた。また、実際に患者さんを治療している現場を見学させて頂き、患者さんへの声掛けや治療説明、寄り添いといったコミュニケーション力が非常に大切だと再確認させられた。先生方は治療をするだけでなく、治療と共にコミュニケーションを患者さんと取ることによって、患者さんの精神的な面でも支えになっていると考えた。

現在自分は三年生の後期となり、実習の時間も増えており、模型に対してだが、実際の患者さんをイメージしながら行っている。早期臨床実習で実際に治療する現場を見させて頂いたからこそ実

習でも実際の治療をイメージしながらできるということを実感している。実習は精神的にも肉体的にも疲労があるが、毎回の実習で得られることをしっかり自分のものにできるように努めていきたい。

これから学年が上がるにつれてより今までの知

識が必要な場面が増えていくと思うが、その重要性を早期臨床実習で実感させられた。残りの学生生活では、自分の理想とする歯科医師になるためにも、知識、手技、コミュニケーションその全てを高められるように努めていきたい。



ポリクリを終えて

歯学科5年 吉田 貴大

4年生までの過酷な模型実習を終え、ようやくひと息ついていたところにポリクリ実習は容赦なく始まりました。それは、生身の人間に対して処置を行うという点で、模型実習に比べ遥かに実践形式の実習となっていました。ポリクリでは診療を行う上で必要な知識・技能を一通り学びましたが、その中で最も印象的だったのが伝達麻酔の実習です。麻酔実習はポリクリで行う数少ない侵襲的処置のひとつであり、生身の人間に針を刺す経験などしたことない私にとってその緊張感は他の実習とは一線を画していました。しかし、この経験を経て技能的な面とは別に私は次の3つのことを学びました。1つ目は予習の大切さです。麻酔実習では実習前に麻酔科の先生からの講義があり、そこで手技を事細かに学びました。そのおかげで私は十分なイメージトレーニングを行うことができました。2つ目は常に冷静であることの大切さです。実習中、急に針が進まなくなることがありました。そんな時、焦らずすぐに先生に報告し助力してもらうことで事態はすぐに解決しました。

3つ目は患者の抱く感情です。当然初めての処置に学生は不安を感じているため、手が震えたり、「ごめん」などと声をかけたりします。これが患者目線だととても心配になるのです。つまり、患者さんの立場で最も不安を感じるのは、術者が不安を感じている時だということがわかりました。このことから、患者さんの前では不安を感じてもそれを態度に出さず、常に堂々としていくことが大切だと学びました。

以上の3つの学びは臨床実習で実際に患者さんと関わっていくにあたって殊更に大切であると実感しています。ポリクリでは他にも様々な学びがあったので、それらを活かして臨床実習に励みつつ、さらに学びを深め、良き歯科医師になるため

の礎にしていきたいです。

歯学科5年 内澤 星七

怒涛のCBT・OSCEを通過し、臨床実習が開始してからあっという間に3か月が経過しました。進級したのがつい最近のことのように感じる一方で、臨床実習が始まって以降、これまでの勉強不足を痛感する場面が多く、実習中に躓くたびに強い後悔を覚えています。中でも、ポリクリの段階でもっと主体的に学んでおくべきだったと強く感じています。

現在の立場から振り返ると、当時はポリクリの重要性を十分に理解できていませんでした。ポリクリでは、症例を想定した治療計画の立案や補綴物の設計、模型を用いた歯内治療、CR充填、支台歯形成、切開・縫合など、各専門診療科にわたる幅広い処置を学びました。また、生徒同士での相互実習として、麻酔や歯周精密検査を行う機会もあり、実際の人を対象とした処置を経験しました。これらは、座学や基礎実習で得た知識を臨床的なレベルへと高め、臨床実習に備えるための重要な実習であったと、今になって実感しています。

しかし当時は、テストや課題に合格することを目的としてしまい、各手技の臨床的意義や実際の診療を想定した思考が不十分でした。現在の臨床実習では、これまでに学んだ基本操作や知識が前提となる場面が多く、その理解や技術の不足を痛感しています。特に、処置の手順を暗記するだけで、なぜその操作が必要なのかを深く理解していなかった点は、大きな反省点です。

また、相互実習を通して患者の立場を体感できる機会があったにもかかわらず、その経験を十分に生かせていなかったことも課題だと感じています。相互実習では処置を行う側だけでなく、受け

る側として不安や緊張、身体的・精神的な負担を実感する機会がありました。本来であれば、この経験を通して患者の立場に立った声かけや説明、疼痛や不安への配慮の重要性をより深く理解すべきでしたが、十分に生かすことができていなかったと反省しています。今後は臨床実習の一つ一つの経験を通して知識と技術を再構築し、将来歯科医師として臨床に携わるための基盤を確かなものにしていきたいと考えています。

歯学科5年 大沼 柊太

はじめまして。この度歯学部ニュースを執筆させていただき、歯学科5年の大沼柊太です。歯学部での生活も残り一年近くとなりました。残りの日々も一日一日を大切に、これまでの学びを確かなものにできるよう努力していきたいと思ひます。

5年前期のポリクリでは様々な診療科を周り、その診療科ごとの治療を見学して体験させていただきました。講義や実習を通して学んできた知識や技能が、実際の臨床でどのように活かされているかを実際に見て学習することができました。加えて、先生方が用いているテクニックなども見せていただくことができ、多くの工夫が積み重なって歯科医療が成り立っていることを実感しました。

また、学生同士での相互実習も行いました。相互実習ではクラスメイトとはいえ実際の人に処置を行うため、わずかな操作ミスや配慮不足が相手の不快感や不安につながる可能性があるため、大きな緊張感をもって臨む必要がありました。特に、器具の扱い方や姿勢、声かけ一つひとつに注意を払う難しさを実感しました。また、患者さんの立場を経験することで、説明が不十分な場合の不安や丁寧な声かけが与える安心感を身をもって理解することができました。

現在、臨床実習が始まり先生方のご指導の下、患者さんへ診療を行っています。慣れない診療に苦戦することも多いですが、これまでの実習を振り返りながらより確かな知識をつけられるよう努めています。これからも常に緊張感を持ち、患者さんの立場に立って考えることを忘れずに臨床実習に励みたいと思ひます。



「ポリクリ 班員との写真」筆者は後列右から2番目

名誉博士号を拝領して

Universitatea de Medicină și Farmacie “Carol Davila” din Bucureștiより名誉博士号を拝領して

口腔生命福祉学講座口腔保健学分野
Roxana STEGAROIU

この度、2025年10月24日、出身大学であるルーマニアのUniversitatea de Medicină și Farmacie “Carol Davila” din București（カロール・ダビラ・ブカレスト医科薬科大学）から Doctor Honoris Causa（ラテン語、名誉博士）の称号を拝領いたしました。

授与式はカロール・ダビラ・ブカレスト医科薬科大学第13回学術大会の一部として行われ、大学の役員が壇上に着席される中、学長が称号の授与の背景を説明されてから同大学の歯学部長より名誉博士号の授与の基となった長年にわたる研究業績

や教育業績に加えて同大学と新潟大学との交流への貢献を称えられました。その後、学長より名誉博士号の証書、Laudatio（ラテン語、称賛された業績）および母校を設立したカロール・ダビラ医師の胸像を拝領いたしました。最後に、それらの受理に当たり短いスピーチを行いました。

今回いただいた証書には「長期にわたり医学や知識の発展に努力したため」との記載がありますが、それは身に余る名誉であると同時に今後のさらなる活動への大きな刺激にもなりました。

大学卒業の翌年から国費留学生として来日し、1992年10月より現在に至るまで、新潟大学歯学部において研究生、大学院生を経て教員として励んでおりましたことから、本称号の授与は長年にわたり新潟大学歯学部の多くの先生方の多大なるご指導、ご協力、ご支援をいただいたお陰でございます。この場をお借りして心より感謝申し上げます。



カロール・ダビラ・ブカレスト医科薬科大学の学長より証書を拝領する本人（中央、右）



名誉博士号の証書（ラテン語とルーマニア語の訳）、Laudatio（筒の中）および母校を設立したカロール・ダビラ医師の胸像

学会受賞報告

日本歯科保存学会奨励賞

受賞報告

う蝕学分野 齋藤 瑠郁

この度、令和7年6月に開催された第162回歯科保存学会学術大会において、奨励賞を受賞しました。受賞論文のタイトルは、A novel 12-membered ring non-antibiotic macrolide EM982 attenuates cytokine production by inhibiting IKK β and I κ B α phosphorylation です。

本研究では、マクロライド系抗菌薬が抗菌作用とは別に持つ免疫調節作用に着目しました。この「免疫調節」は、主に非感染性の炎症性呼吸器疾患に対して既に臨床応用されています。一方で、既存のマクロライド系薬は抗菌薬であるがゆえに、多用には薬剤耐性菌増加のリスクを伴います。そこで、北里大学との共同研究により、化学構造を改変したマクロライド誘導体の中から、抗

菌作用を示さず免疫調節作用のみを有するものを選出し、作用機序の一端を明らかにしました。

私たちが日々対峙する歯周炎の病態にも免疫応答が深く関与しています。また、歯周炎局所の炎症が遠隔臓器に悪影響を及ぼすこと、癌や心血管系疾患などの生活習慣病の基盤病態にも慢性的な炎症が存在することが明らかになっています。このような背景から、免疫調節による治療的アプローチは幅広い疾患に対して有効である可能性があると考えています。今後は、これまでの*in vitro*実験中心のデータを基盤に、感染性および非感染性の炎症に対する免疫調節の効果について、生体における解析を継続する計画です。

結びに、今回の受賞にあたりご指導・ご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。

日本歯科保存学会 学術賞・優秀論文賞 受賞報告

う蝕学分野 大 倉 直 人

この度、第162回日本歯科保存学会春季学術大会において、日本歯科保存学会「学術賞」ならびに「優秀論文賞」を受賞いたしましたので、ご報告申し上げます。

学術賞は、歯髄創傷治癒および再生過程におけるアスコルビン酸輸送経路の役割を明らかにした研究が評価されたものです。主論文である“SVCT2-GLUT1-mediated ascorbic acid transport pathway in rat dental pulp and its effects during wound healing”では、ラット歯髄創傷モデルを用いてSVCT2-GLUT1によるアスコルビン酸輸送の局在、および経時的变化を解析し、この経路が象牙芽細胞様細胞の分化、血管新生、コラーゲン形成など創傷治癒に深く関わることを示しました。

優秀論文賞は「歯髄創傷治癒および歯髄再生過程におけるリン酸トランスポーターPit-1の免疫組織学的解析」に対して授与されたものです。Pit-1は象牙芽細胞（象牙芽細胞様細胞）や血管周囲細胞に選択的に発現し、修復象牙質形成や石灰化の進行に関与することが明らかとなり、歯髄再生におけるリン酸輸送の重要性を示しました。

今回の受賞は、歯髄創傷治癒・再生に関わるア

スコルビン酸・リン酸のトランスポーター研究が総合的に評価されたものです。今後も、より低侵襲で予知性の高い治療法の構築を目指して研究を進めてまいります。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導・ご支援を賜りました野村由一郎教授、吉羽永子教授、高原信太郎先生をはじめ共同研究者およびう蝕学分野の先生方に、心より御礼申し上げます。



左：著者 右：野村教授

第23回日本歯科医学教育学会 教育システム開発賞受賞報告

歯科臨床教育学分野 長 澤 伶

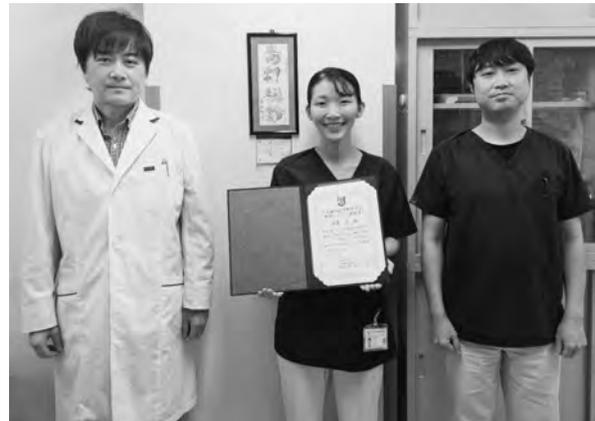
この度、第44回日本歯科医学教育学会総会および学術大会にて、「ミラーテクニック指導のためのVRシステムを用いた新たな教育ツールの開発」と題して行った口演が、第23回日本歯科医学教育学会教育システム開発賞を受賞しましたので、ご報告させていただきます。

歯科医師は、狭小な口腔内で治療を行わなければならないため、ミラーテクニックは修得必須の技能とされています。しかし、ミラー面に映る鏡像は、確認する者の視点によって見え方が異なるため、その指導は難しく、効果的な教育方法が確立されていないのが現状です。

そこで我々は、仮想現実（Virtual Reality）を用いることで、操作者の視野を他者が確認することができ、これによりVR空間内のミラーの鏡像を共有することができるシステムを工学部 今村研究室とともに共同開発しました。そして、このシステム用いたミラーテクニックの客観的評価を試みました。結果として、デンタルミラーの操作技能は臨床経験を積むことで向上することが明らかとなり、本システムの有用性を実証することができました。今後、さらなる改良を加えて、歯

科教育において従来にないミラーテクニックの教育ツールとして発展する可能性があると考えます。

最後になりますが、ご指導を賜りました藤井規孝教授、佐藤拓実先生、工学部 今村孝教授をはじめ、共同研究者の皆様、研究にご協力いただきましたすべての皆様にご場をお借りして心より御礼申し上げます。



ご指導いただいた藤井規孝教授、佐藤拓実先生と（筆者は中央）

第70回日本口腔外科学会総会・学術大会 最優秀口演発表賞 受賞報告

顎顔面口腔外科学分野 相澤 有香

この度、第70回日本口腔外科学会総会・学術大会において、最優秀口演発表賞を受賞いたしました。

近年のがん研究では、治療標的として腫瘍微小環境が注目されています。当研究では、患者由来がん関連線維芽細胞を含む4種類の細胞を共培養し、口腔がんとその周囲組織を同一環境で模倣した3次元培養モデルの作製に成功しました。また、本モデルに重粒子線照射を行い、治療効果と口内炎等の副作用の同時評価が可能であることを

示しました。今後、本モデルのさらなる高度化を通じ、新規治療開発や個別化医療への貢献が期待されます。臨床応用を意識して基礎研究に取り組んできた中で、このような評価をいただいたことは大変光栄であり、身の引き締まる思いです。

研究にあたり、生体組織再生工学分野 泉 健次教授、顎顔面口腔外科学分野 富原 圭教授、平井 秀明准教授をはじめ、博士課程在学中よりご指導いただきました先生方に心より御礼申し上げます。



Outstanding Poster Presentation Award at The 70th Congress of the Japanese Society of Oral and Maxillofacial Surgeons (JSOMS)

Center for Advanced Oral Science, Department of Oral and Maxillofacial Surgery
Prasiddha Mahardhika El Fadhlallah

I am honored to receive the **Outstanding Poster Presentation Award** at **JSOMS**, held at the Fukuoka International Congress Center. My presentation, titled “**Investigation of therapeutic efficacy of microparticle-formulated erythromycin in a BRONJ attributed to periodontitis model,**” introduced a new therapeutic approach for bisphosphonate-related osteonecrosis of the jaw (BRONJ).

We evaluated erythromycin in biodegradable microparticles (PLA14200) as a local treatment. A single administration improved gingival healing, enhanced bone formation, and reduced inflammation. Tissue and gene analyses showed restored bone cell balance, stronger DEL-1 expression, and activation of microtubule-related pathways, supporting its potential to promote natural bone repair in BRONJ.

This accomplishment marks a meaningful step in my academic development. I am deeply grateful to my supervisors, Research Professor Tomoki Maekawa (Center for Advanced Oral Science) and Professor Kei Tomihara (Division of Oral & Maxillofacial Surgery), as well as the faculty members and Ph.D. students of the Center for Advanced Oral Science, for their guidance



At the award ceremony of the 70th Congress of the Japanese Society of Oral and Maxillofacial Surgeons (JSOMS)

第9回日本矯正歯科学会論文賞を受賞して

歯科矯正学分野 大川 加奈子

この度、Clinical and Investigative Orthodonticsに掲載の「Tongue pressure production and orofacial muscle activities during swallowing are related to palatal morphology in individuals with normal occlusion」(83巻2号:61-69)が、第9回日本矯正歯科学会論文賞を受賞し、2025年9月29日～10月1日に札幌にて開催された第84回日本矯正歯科学会学術大会において、表彰を受けましたのでご報告致します。

本論文は、個性正常咬合者において嚥下時の舌圧発現様相および顎顔面筋群筋活動を同時測定

し、口蓋形態との関係性を検討した結果、舌圧や口腔周囲の筋活動は口蓋幅径および口蓋深さとの関連が示唆されたという内容です。本論文で得られた知見は、不正咬合患者における機能的特徴の理解にもつながると考えています。

最後に、共同著者の齋藤功先生、丹原惇先生、高橋功次朗先生、福井忠雄先生、長崎司先生、包括歯科補綴学分野の堀一浩先生、大川純平先生、大阪歯科大学高齢者歯科学講座の小野高裕先生には、多大なるご指導を賜りまして心より感謝申し上げます。



新井一仁理事長と授賞式にて（筆者左）

Asia Dysphagia Society Young Investigator Award受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 筒井雄平

この度、バンコクで開催されたAsia Dysphagia SocietyにてYoung Investigator Awardを受賞しましたので、ご報告させていただきます。発表演題は、私の学位研究である「ラットの嚥下における顎二腹筋後腹の中枢神経制御」です。開口および嚥下時の舌骨挙上を担うとされる舌骨上筋群は、摂食嚥下リハビリテーションにおいて注目されますが、それらの筋の中枢制御機構は不明な点が多いままです。その一つである顎二腹筋は前腹と後腹に分かれ、三叉神経、顔面神経

にそれぞれ支配されます。この筋が摂食嚥下運動に関する独自の神経ネットワークを構築するという着想の下、顎二腹筋後腹の運動核（副顔面神経核）の一部が嚥下時に活動することを同定しました。今後は咀嚼への関与を探る予定です。

最後に、Neuroscienceを教えてください、井上誠教授、辻村恭憲先生、口腔生理学分野の山村健介教授、岡本圭一郎先生はじめ、日頃温かいご支援を賜っております医局の先生方に感謝申し上げます。



日本顎口腔機能学会第74回学術大会 優秀賞 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 相澤 知里

この度、日本顎口腔機能学会第74回学術大会において優秀賞を受賞いたしました。

本学術大会では「異なる物性の米飯咀嚼時における舌筋筋活動量の比較」をテーマに、研究成果を発表しました。咀嚼嚥下過程において、舌は食品物性などの末梢環境に応じた精緻な運動を行い食塊形成および移送を担っています。本研究では、吸引型表面電極を利用した舌運動記録を用いて、物性の異なる3種類の米飯食品摂取時の舌筋活動の比較、検討を行いました。結果として、

舌筋サイクル筋活動量は、咀嚼ステージの進行に伴う硬さの低下、水分値の上昇に関連して有意に増加することが示されました。この度の受賞を励みに、今後は筋電図と顎運動、舌運動軌跡を含めた新たな視点から、さらに検討を重ねていきたいと考えています。

本研究、発表にあたり、丁寧にあたたくご指導くださいました井上誠教授、真柄仁先生をはじめ、多大なるお力添えを賜りましたすべての先生方に心より感謝申し上げます。



学会受賞報告

予防歯科学分野 星野 剛 志

この度、第25回日本歯科医学会学術大会において、ポスター賞 若手研究者部門を受賞いたしましたのでご報告いたします。演題名は「高齢者における血漿中抗*Porphyromonas gingivalis*抗体価と孤立性収縮期高血圧との関連」です。

孤立性収縮期高血圧（ISH）は動脈硬化により大動脈の弾性が低下した高齢者に多く見られる高血圧です。本研究では地域在住高齢者を対象とし、歯周病原性細菌であり動脈硬化への関与が示唆されている*Porphyromonas gingivalis*（Pg）に対する血漿中IgG抗体価（抗Pg抗体価）とISH

との関連を検証しました。その結果、抗Pg抗体価が高い者でISHの頻度が有意に高く、歯周病とISHとの間の関連が示唆されました。今回の受賞を励みにし、今後も高齢者の口腔保健に寄与できるよう研究に尽力して参ります。

最後になりましたが、本分野の小川祐司教授をはじめ、ご指導を賜りました口腔保健学分野の葭原明弘教授、北海道大学の岩崎正則教授ならびに諸先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



Academic Award Report

Division of Preventive Dentistry Olenka Yomira VALENZUELA TORRES

I am honored to have received the Best Country-Regional Award from the Asian Academy of Preventive Dentistry (AAPD) Conference held in Indonesia for my presentation entitled “Effectiveness of Antibiotic Periodontal Treatment on Volatile Sulfur Compound Levels in Diabetic Patients”.

This study was designed as a randomized controlled clinical trial to investigate the impact of periodontal therapy with and without adjunctive antibiotics on halitosis in patients with diabetes mellitus. A total of 30 participants aged 37 to 83 years were enrolled and allocated into two groups: a non-antimicrobial treatment group and an antimicrobial treatment group. In the latter, 2% minocycline was locally administered at weeks 0, 2, 4, and 6 to periodontal sites with probing depths of 4 mm or greater.

The results demonstrated a significant reduction in methyl mercaptan (CH_3SH) levels in the antimicrobial group, accompanied by a decrease in the number of patients ex-

ceeding the clinical threshold for malodor. As CH_3SH is primarily derived from periodontal tissues, it appears to be particularly responsive to periodontal treatment combined with local antibiotic therapy.

In contrast, no significant changes were observed in dimethyl sulfide ($(\text{CH}_3)_2\text{S}$) or hydrogen sulfide (H_2S). H_2S , which mainly originates from tongue coating, showed limited response to localized periodontal intervention, while $(\text{CH}_3)_2\text{S}$, considered to be of systemic origin, remained unaffected by antimicrobial treatment.

Taken together, these findings suggest that adjunctive antibiotic therapy selectively improves halitosis of periodontal origin in diabetic patients. Receiving this award marks an important step in my academic journey and further motivates me to continue pursuing high-quality research. I would like to express my sincere gratitude to Professor Hiroshi Ogawa, Professor Kaname Nohno, and Dr. Kumiko Minagawa for their invaluable guidance and continuous support.



Group photo of the Division of Preventive Dentistry, Niigata University, at the conference venue. The author is third from the left.



Group photo at the conference venue. The author is second from the left.

学会受賞報告

口腔生命福祉学専攻博士前期課程 室 橋 波 菜

この度、日本歯科衛生学会第19回学術大会にてポスター賞を受賞しましたので、ご報告させていただきます。演題名は「地域在住高齢者における動脈硬化マーカーとしての脈圧と刺激時唾液量の関連」です。

高齢者において唾液量減少の発症頻度は増加し、また、血中コレステロールとの関連が認められており、動脈硬化と関連する可能性があることが報告されています。一方、高齢者では末梢の動脈硬化の指標とされる脈圧（収縮期血圧と拡張期血圧

の差）は増加します。そこで本研究では、高齢者における脈圧と唾液量減少の関連について検討を行いました。その結果、地域在住男性高齢者において、脈圧が70mmHg以上であることは、刺激時唾液量減少と関連することが示唆されました。

最後となりますが、ご指導いただきました口腔生命福祉学講座の濃野要教授、葭原明弘教授、米澤大輔准教授、柴田佐都子准教授に感謝申し上げます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



表彰式にて 濃野先生、米澤先生と 筆者中央

日本歯科衛生学会第19回学術大会 口演発表賞 受賞報告

口腔生命福祉学講座 福祉学分野 松 本 明日香

この度、日本歯科衛生学会において口演発表賞を受賞しましたことを報告いたします。

発表タイトルは「障害福祉施設通所成人知的障害者を対象とした実行機能と関連する歯磨き行動質問紙の検証」です。本研究は、知的障害者の実行機能と関連する歯磨き行動を評価するために先行研究で開発された質問紙について、因子妥当性や信頼性の検証を行いました。その結果、質問紙の有用性が検証され、知的障害者の歯磨き行動において特に支援が必要な因子が明らかになりました。この結果をもとに、今後より効果的な歯磨き

支援の方策を検討できればと考えております。

今回、このような賞をいただけたことを大変光栄に思うとともに、調査にご協力いただきました福祉施設利用者ならびに職員の皆様に心より感謝申し上げます。この受賞を励みにし、成果を還元できるよう努めてまいります。

最後になりますが、研究をご指導いただきました口腔生命福祉学講座 柴田佐都子先生、ロクサーナ ステガロク先生、小川友里奈先生、大内章嗣先生、東京学芸大学 池田吉史先生にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。



素顔拝見

組織再建口腔外科学分野

竹内涼子

皆さん、こんにちは。組織再建口腔外科学分野の竹内涼子です。普段の行動範囲が歯学部A棟と病院を中心としているため、歯学部建物のメインエリアを利用する機会が多くありません。「素顔拝見」とのことですので、今回は素顔の要素を多めに、改めて自己紹介をさせていただきます。

出身は新潟県糸魚川市で、日本海に面した海沿いの町で育ちました。糸魚川は、日本列島を東西に分けるフォッサマグナや、国石である翡翠（ヒスイ）の産地として知られており、地質や鉱物に興味のある方には密かに人気のある地域です。豊かな自然に加え温泉も多く、帰省するたびに心身ともにリフレッシュできる大切な場所となっています。

趣味は舞台鑑賞とワインです。舞台鑑賞では、宝塚歌劇、劇団四季、東宝などのお芝居やミュージカルを中心に、全国各地へ観劇に足を運んでいます。同じ作品でも、演者や演出、劇場によって印象が大きく変わるところが面白く、生の舞台ならではの臨場感や一回性を楽しんでいます。観劇にはオペラグラスは必需品で、舞台の隅々にまで



ピノ・ノワールの畑とワイン 余市にて

こだわった演技や演出を発見すると、思わず嬉しくなります。

ワインについては、2024年に日本ソムリエ協会認定ワインエキスパートの資格を取得し、現在は日本ワインを中心に、実際に現地へ赴いて土壌や気候、醸造について学びを深めています。日本全国に約500か所あるワイナリーやヴィンヤードのうち、これまでに97か所を実際に訪問してきました。作り手の方々と直接お話し、ブドウ畑の空気を感じ、土地や品種の個性、醸造技術の違いを知ることによって、ワイン作りの奥深さをより強く感じるようになりました。世界的な銘醸地のワインはもちろん魅力的ですが、日本ならではの風土で生み出されるワインにも大きな可能性を感じています。また、一つひとつの細かな条件の違いでぶどうの出来やワインの仕上がりが大きく変わる点は、手術手技の各ステップや実験のプロトコールにどこか似ているところがあるように感じます。仕事でも趣味でも、「なぜそうなるのか」という疑問に対し、そこに至る細部の積み重ねを紐解きたくてしまう性分なのかなと思います。

今後も口腔外科の知識と技術の向上に努めるとともに、自身の興味や学びを大切にしながら、日々の診療および研究に真摯に取り組んでまいりたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



小児歯科・障がい者歯科診療室

五月女 哲也

こんにちは、小児歯科・障がい者歯科診療室の五月女哲也です。この度、貴重な機会をいただきましたのでこの場をお借りして自己紹介をいたします。

歯学部ニュース、特にこの素顔拝見は学生の頃から楽しみに読んでおりました。学生時代の自分

たちからすると教員の先生方は日常を想像できない謎の存在でしたので、人間らしさを伺い知れる数少ない機会でした。あれから自分も教員になり、今では学生から「先生がお子さんとトイザラスにいるのを見ました」と報告してもらえるようになりましたが、子どもどころか結婚もしていません。今では自分も謎の存在のようです。

1990年10月11日生まれ、栃木県宇都宮市出身です。歌手の秦基博と誕生日が同じで、顔が似ているといわれます。余談ですが、母は自分と顔が似ているという理由で彼のファンになり、今では自分を置いて全国各地を飛び回っています。性格は気さくです。丈夫が取り柄で、中学高校と無遅刻無欠席の皆勤賞でした。インフルエンザにかかったことがないのが自慢です。地元の宇都宮は非常になにもないところで、のんきな日々を過ごしました。けっこういいところですよ。趣味はサウナ、植物、音楽、犬、お香、甘いもの等々たくさんありますが、今最も力を入れているのは爬虫類飼育です。現在カメレオンを6匹飼っており、目下の目標は繁殖です。2009年入学の本学45期生で、新潟での暮らしはもう15年以上になります。大学時代はほぼ笑っており、笑っていない時は寝ていました。素敵な友人や先輩後輩に恵まれたことは今思い返しても本当に宝物です。部活は袴姿がかっこいいというだけで弓道部に入部したものの、同期は口腔生命福祉学科の子と2人きりで、最終的には主将をやることになり大変つらい思いをしました。不勉強がたり国家試験浪人をしっかりとした後になんとか歯科医師になり、当院Aコースで研修をさせていただき本学小児歯科学分野の大学院を経て令和5年9月1日に当院小児歯科・障がい者歯科診療室の助教を拝命し、現在に至ります。

小児歯科・障がい者歯科という分野は、患者が自身の意思で来院しない、という点に特徴があるように思っています。来たくもないのに連れてこられるわけですから、我々歯科医師は敵で、嫌なことをする存在です。協力する気にもならないでしょう。そのような患者さんたちとコミュニケーションをとり、数多の方法で近づき、信頼関係を構築できたときに得も言われぬ達成感を感じま

す。お子さんたちにとって我々は往々にして初めての歯科医師です。幼いころの記憶は消えませんが、良くも悪くも生涯にわたる歯科の印象を決定づけることになるでしょう。その責任とやりがいを感じながら、日々患者さんと接しています。

これからも患者さんひとりひとりとまっすぐ向き合っ、歯医者もまあ悪くはないなと思っていただけ汗をかいてまいります。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



摂食嚥下リハビリテーション学分野

筒井雄平

令和7年6月1日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命しました、筒井雄平と申します。素顔拝見の執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

実家は東京都小平市にあります。ブルーベリー栽培発祥の地とされ、かつて多摩川から江戸への上水道として使用された玉川上水を有する緑豊かな地域です。高校は近隣の都立国立（くにたち）高校を卒業しました。文武両道を掲げ、真に両立した優秀な同級生たちは誇りですが、私は中学生から続けたバレーボールに没頭していました。朝練の後にお弁当を食べ（朝弁）、昼休みに昼練、放課後も練習に明け暮れた日々が懐かしいです。悲願の東京都ベスト16を勝ち取った矢先に、震災があり、夢の関東大会への道が途絶えてしまいました。その後、浪人を経て本学歯学部に入學するわけですが、排球魂（漫画ハイキューは未読）が抜けない私は、当時先輩方が作られた部活のホームページを見つけ連絡を取り、入学前から練習に参加、新入生歓迎会では同級生を勧誘していました。さらに大学で6年続けたバレーボールは私の人生の一部であり、この競技との出会いが最初の転機であったと思います。

二回目の転機は、以前「大学院へ行こう」でも書きましたが、学部4年時の摂食嚥下リハビリテーション学との出会いです。摂食嚥下障害の存

在に驚き、人の生死に歯科として関わる可能性を感じて以来、当分野へ入局、臨床および研究への興味関心、やりがいは年々増えています。有難いことに大学の急性期病棟のみならず、市内の居宅や、長岡市の山間部の施設往診を経験し、摂食嚥下リハという形で歯科を必要とくださる方が増えていることを実感し、身が引き締まる思いです。

学位研究では、開口にも嚥下にも働くと考えながら、中枢制御機構や機能的な役割が明確ではない舌骨上筋群に着目し、動物実験を行っていました。神経科学と出会い、摂食嚥下運動のメカニズム解明に興味を持ち、国際学会にて、言葉は違えど、同じ関心を持つ研究者と分かり合えた興奮が、大学人への一歩を後押しした転機だと思います。大学院4年時の最後には学術振興会の支援を受けて、豪州はMacquarie大学医学部神経生物学教室へ留学する機会を頂きました。ある論文を医局の抄読会で紹介したことを機に、多くの縁が繋がり、豪州で唯一摂食嚥下運動の中枢制御に注目する彼らに運命的に出会うことができました。今後もこの縁を大事にしたいです。

今や摂食嚥下リハビリテーションに関連する数多くの報告を目にしますが、病態理解の根底には、基礎的なメカニズムの理解が重要であることを痛感します。臨床および基礎研究のデータを積み上げていき、歯科という立場から摂食嚥下リハビリテーション学分野のさらなる発展に貢献したいです。今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



豪州タロンガ動物園にて



歯周診断・再建学分野

田村 光

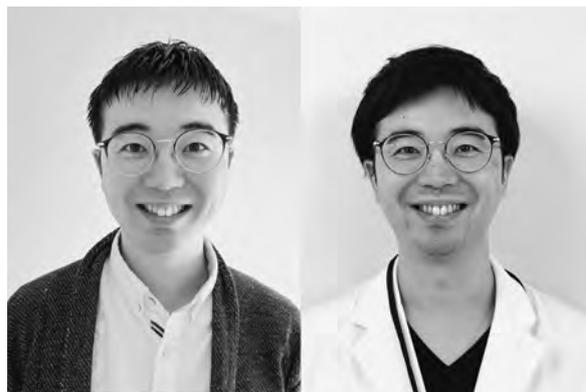
2025年4月1日付でスイングバイ・プログラム助教を拝命しました、歯周診断・再建学分野の田村光と申します。この度、素顔拝見を書く機会をいただきました。今日は2025年12月28日、私の34回目の誕生日に筆を執り、皆さまに自己紹介をさせていただくとともに自身の半生を振り返ってみたいと思います。

新潟県長岡市で、17期卒の父田村宏とその患者であった母から生を受けました。軽い嚥下障害があったためなのか、よくムセよく戻す子供だったようですが、無事にすくすく成長し、中学では野球部に、高校では音楽部合唱班に、大学では弓道部に所属していました。昔から、「何をするかより誰とするか」を優先して選ぶ性格であったため、どの時代も周りには好きな人たちがたくさんいたように思います。

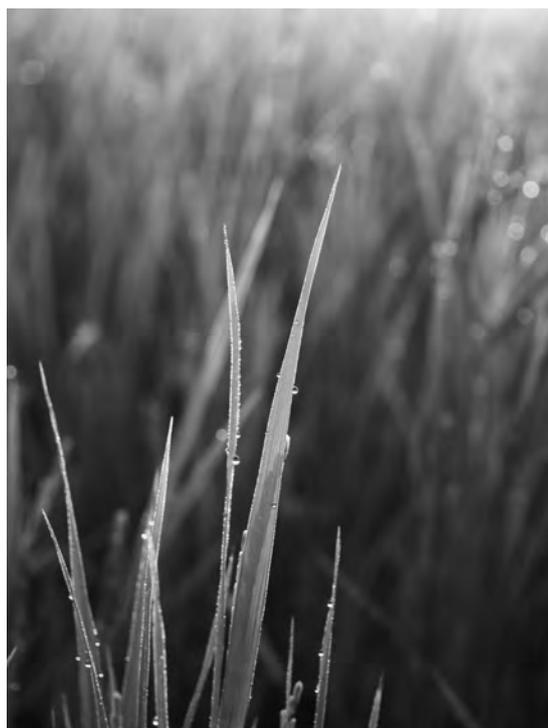
新潟大学歯学部を卒業後、研修医Bコースから歯周診断・再建学分野へと進み、大学院の研究では、微生物感染症学分野にて寺尾豊教授や前川知樹先生にご指導をいただきました。歯周病における炎症や骨吸収を制御する新たな方法を探索し、有益な効果を持つ米ペプチドの発見や、今や全国区になりつつあるDEL-1の研究にも携わらせていただくことができました。その後、多部田康一教授にご紹介いただきアメリカ東海岸のボストンにあるタフツ大学医学部免疫学分野のPoltorakラボに3年間留学をしました。留学先では、サイトカインストームなどの急性炎症を制御する新規因子の同定と、その分子メカニズムの解明を目的として、免疫遺伝学的手法を用いた研究を行いました。アメリカでの仕事や生活では、日本とは違った多くのことを学び、感じることができました。例えば美的感覚の違いを感じました。どちらも同じような写真を見せて髪を切ってもらいましたがアメリカの美容室（写真左側）と帰国後日本の美容室（写真右側）では、仕上がりにかなり違いがありました。また、ラボの同僚はボス夫婦を除いてアメリカ人でしたが、彼らは仕事に臨むときの身体やメンタルのコンディションをととても大事に

していて、いつも元気に働いていたことが印象的でした（ロシア人のボスはジャパニーズ根性と忍耐を評価してくれました）。円安と物価高が進んだ影響で、生活には苦労した面もありましたが、妻や両親の支えと助けもあって3年間楽しく過ごすことができました。

若輩ものではありますが、今後研究・臨床・教育いずれにおいても学び成長して、本学の発展に貢献できるよう精一杯精進してまいりますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



左アメリカ美容室後筆者、右日本美容室後筆者



Embark on a New Journey in Niigata

摂食嚥下リハビリテーション学分野 Ho Yin LEUNG

こんにちは！ I am Ian (イアン) from the Division of Dysphagia Rehabilitation. I was graduated from the University of Hong Kong in 2019 with a Bachelor's Degree of Science in Speech and Hearing Sciences. After completing my undergraduate study, I had worked as a speech therapist (言語聴覚士) in a non-governmental organization in Hong Kong for 4 years. My work focused primarily on dysphagia management for elderly residing in long-term care facilities. Apart from that, I sometimes visited day-care centers as well and provided rehabilitation services for community-dwelling seniors.

The idea of studying abroad in Japan came up when I was working in the geriatric rehabilitation sector. I came across a wide variety of dysphagia-related innovations that were originated from Japan, including appealing dysphagia-friendly bento, specialised enzyme for diet modification, oral hygiene kits for frail patients, and lingual rehabilitation tools that could be performed individually by patients at home. These cutting-edge products have greatly enhanced patients' quality of life and alleviated caregiver burden.

Japan has always been the global pioneer in dysphagia rehabilitation, with significant research effort invested in the field. The annual meeting of Japanese Society

of Dysphagia Rehabilitation provides a platform for encouraging knowledge exchange and advocating evidence-based practices. On the other hand, well-categorized dysphagia-friendly products can be easily found in the local community, which reflects high social awareness and respect on patients with swallowing difficulties among the Japanese society. In this regard, I have decided to continue my endeavor on dysphagia rehabilitation in Niigata University since September 2023.

Studying in Niigata University has been fruitful and rewarding, with ample opportunities to meet patients with different medical etiologies. I also greatly appreciate the opportunity to observe instrumental evaluations of high-risk dysphagic patients, something that I rarely had the chance or resource to access during my previous work in Hong Kong. Colleagues and friends from my division have been helpful and encouraging during my clinical and research works. I have been enjoying my post-graduate study in Niigata University.



退職によせて

退職によせて

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔保健学分野 教授 小野 和 宏



新潟大学歯学部の皆さまにおかれましては、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。2026年3月をもちまして定年退職を迎えることになりました。これまでのご厚情に感謝の意を

表すとともに、ひとこと、ご挨拶を申し上げます。

私は1986年に新潟大学歯学部を卒業し、その後、故 大橋 靖教授が主宰される口腔外科学第二講座（現 顎顔面口腔外科学分野）に入局させていただきました。また、大学院生のときは、故 島田久八郎教授のご指導のもと、口腔生理学講座（現 口腔生理学分野）に所属させていただきました。そのときからこれまで、新潟大学歯学部で長きにわたりお世話になってまいりましたが、私の教員生活は、仕事の内容から、大きく前半と後半の二つの時期に分かれています。前半の15年間ほどは、もうご存知の方は数少ないと思いますが、口腔外科診療、特に口唇口蓋裂治療にたずさわって、そこで得た知見や経験をもとに臨床研究に従事しておりました。その後、ご縁があり、2004年度に設置された口腔生命福祉学科に異動し、学生教育中心の生活を送ってまいりました。いま振り返ると、異動の直前にスウェーデンのマルメ大学に留学しており、新設された口腔生命福祉学科には専門課程が整備されておらず、留学先で見聞きた問題 基盤型学習（Problem-Based Learning：PBL）をもとにカリキュラムを構築するようにとの歯学部の意向があったのかもしれ

ません。後半の20年間、つまり口腔生命福祉学科に移ってからは、当時、歯学部長でいらっしゃった前田健康教授のもと、教育担当の副学部長として、口腔生命福祉学科に限らず、歯学科を含めた歯学部全体の教育にたずさわらせていただきました。なお、2018年からの2年間だけでしたが、新潟大学で理事をお務めだった濱口 哲教授のご指導を受け、大学改革担当の副学長として、歯学教育だけでなく、大学教育全般について学ばせていただきました。

大学教員は教育・研究・臨床の3つの仕事をすべからく行うべきだ、とよくいわれますが、限られた時間の中で全てを、また一人で行うことは実際には難しいことです。私の場合は、意識してやってきたわけではありませんが、教員生活の前半は臨床と研究、後半は教育というように、時期により主な仕事が変わりました。また、数多くの教員や職員の方々、さらには学生さんや患者さんのご理解とご協力に支えられてやってきました。このような教員のあり方が望ましいものなのかわかりませんが、置かれた環境の中で、そのときどきの必要性や興味・関心にしがたって精一杯やった、と満足しています。ただ、自身の所属分野である口腔保健学の研究に関しては、十分に貢献できなかったと感じており、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

これまでは、休日を含め、大学と家との間を往復するような毎日を送ってきましたので、退職後は、仕事との両立が難しく犠牲にしてきたことや、やりたくてもできなかったことを楽しむことができると思っています。老害にならないとも限りませんが、私でもお力になれそうなことがありましたら、どうぞお声がけください。最後になりましたが、新潟大学歯学部のますますのご発展を心より祈念いたします。

発信し続けた40年

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔保健学分野 葭原明弘

〈はじめに〉

定年まで2年を残し、このたび新潟大学を退職することとなりました。教員生活は39年、学生時代を含めると実に45年を新潟大学で過ごしたことになります。40年にわたる私の研究と地域貢献の歩みを振り返り、次世代へのメッセージとしたいと思います。

〈研究の歩み〉

平成10年以降、私は「口腔の健康状態と全身の関係」を主軸に研究を進めてきました。たとえば、少数残存歯者では総摂取エネルギー量や緑黄色野菜・果物の摂取量が有意に少ないこと、さらに、骨密度の低下が歯周病進行に結びつくことなどを明らかにしました。こうした取り組みの成果として、245本の論文、417回の学会発表を行うことができました。

なお、先日嬉しいニュースが入りました。スタンフォード大学とElsevier社が科学分野で影響度の高い科学者を特定する研究者リスト「標準化された引用指標に基づく科学者データベース」が更新され、「世界で最も影響力のある科学者トップ2%」に選出されました。

〈地域歯科保健活動の歩み〉

新潟県では昭和56年から「むし歯半減10か年運動」が展開されてきました。私は大学教員として、また1000人を超える会員数を有した市民活動団体である「子供の歯を守る会」の実行委員長として、園・学校におけるフッ化物洗口の普及に尽

力しました。

私が主担当として行った活動で特筆すべきは、園・学校でのフッ化物洗口の実施を中心とするピュレーション・アプローチ、園・学校と地域の歯科診療所が連携したハイリスク・アプローチ、および全県ベースでの情報管理システムの総合的融合システムの構築です。その結果、新潟県は「日本一むし歯の少ない県」となりました。

さらに平成20年には全国初の「新潟県歯科保健推進条例」の制定に草案段階から携わりました。この取り組みは他道府県での条例制定へと波及し、平成23年の「歯科口腔保健の推進に関する法律」の制定へとつながりました。

〈研究や地域歯科保健活動に対する評価〉

今までの研究や地域歯科保健活動に対して多くの評価をいただきました。

- ・日本口腔衛生学会論文奨励賞（個人、平成12年）
 - ・日本口腔衛生学会学術賞“LION AWARD”（個人、平成15年）
 - ・元気にいがた健康アワード準グランプリ（私が代表を務めるNOP法人、平成28年）
 - ・公衆衛生事業功労者表彰（私が代表を務めるNOP法人、令和4年）
 - ・新潟県健康づくり功労者県知事表彰（個人、令和6年）
- 等

〈おわりに〉

「住民の健康寿命延伸」、すなわち「元気で長生き」を実現するためには、口腔の健康を抜きにできません。私たちに託された使命は非常に大きいと思います。私自身、これからも研究者としての好奇心と誠実さを胸に、次の人生を歩んでいきたいと思っています。

退任によせて

口腔生命福祉学講座 神子島 旬 子

令和5年4月1日付けで新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学講座福祉学分野教授を拝命して3年、令和8年3月末日をもって退任いたします。

わずか3年ではありますが、歯学部教職員の皆様には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

新潟県の福祉行政職員として27年間勤めたのち、こちらに参りました。当初は戸惑うばかりの毎日でしたが、何とかその勤めを終えることができました。教職員の皆様だけでなく、このような私の話でも一生懸命に聴いてくれた在学生の皆さん、その他支えて下さったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

新潟県の社会福祉実践の現場での経験しかない私は、就任以降ここで何をなすべきかをずっと考え続けてきました。そして、結局のところ自分にできることしかできないと思い至り、これまでの経験で身につけたソーシャルワークの考え方や姿勢を、自分を通して学生はじめ周囲に伝えていこうと心掛けました。

ソーシャルワークを研究する空閑浩人は「ソーシャルワークは、人々の尊厳が守られ、一人が大切にされ、誰も排除されない社会になることを、弱い人が弱いままで自分を無理して変えなくてもよい社会になることを、私たちが暮らす社会の現

在と未来がそのようなものであることを、願い続ける営み」と説明しています。こうしたソーシャルワークの考え方や姿勢を伝えるという目標に対し、何がどこまでできたのか、考えてみますが答えは出ません。しかし、この3年間たくさんの可能性をもつ学生の人生のひと時に関われたことは、私にとって幸いでした。ここでの学びが、いつか誰かの生活の支えになっていくことを願っています。

私たちは、さまざまな形で人から支えられなければ生きていけない存在です。私もまたそのような「弱い」存在の一人です。それでも、ありがたいことにこうしてここに存在することが認められました。私にできることはわずかしかなかった。だからこそ、自分にできることは誠実に行いたいと思っています。さまざまな生きづらさを抱え、人とうまくつながれず社会的に孤立している人々に対し、積極的に関わり、社会とのつながりをつくることが期待されているソーシャルワーカー。そのソーシャルワーカーの一人として、その時その場で自分に何ができるのかをこれからも考えつづけていきたいと思っています。

このたび、私は再び新潟県の社会福祉実践の現場に戻ります。

これまで、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

末筆ながら、皆様のご健康とさらなるご発展をお祈り申し上げ、退任の挨拶とさせていただきます。

定年に際して記しておきたいこと

生体組織再生工学分野 金谷 貢

約41年間、歯学部でお世話になりました。ありがとうございました。

最初、歯科補綴学第一講座（1補綴）、現在の包括歯科補綴工学分野で10年余りを、次に歯科理工学講座、現在の生体組織再生工学分野で30年余りを過ごしました。

以下、最も長く携わった「歯科理工学」に関連して常々思っていること¹⁾について、また自己紹介的に「歯学部に勤めることになった少しユニークな経緯」を、最後に「歯科理工学の教育体制について感じていること」を記させていただきます。

・「歯科理工学」に関連して常々思っていること

歯がう蝕や歯周疾患でダメージを受けた場合、自己治癒力、投薬あるいはその他の処置によっても欠損歯質が再生することは巨視的にはなく、永久歯が喪失した場合に新しい歯が萌出してくることもありません¹⁾。

そのため、歯科医療においては古くから歯の一部欠損に修復物を用い、喪失歯に対して義歯による欠損補綴を行ってきました。これら修復物や義歯は主に口腔の重要諸機能を回復できる点で義眼等とは一線を画します¹⁾。

すなわち、義眼は「視覚」という眼の重要機能を回復できないのに対して¹⁾、歯の修復物や義歯は「咀嚼機能¹⁾（摂食機能）」、「発音機能¹⁾（構音機能）」を回復できます。また、歯を食いしばれるようになることで「重い荷物を持ち上げる等の全身的機能」も回復できますし¹⁾、さらには「嚥下機能」の回復を円滑にすることもできます。つまり、歯の修復物や義歯は、歯が関係する各種の重要機能を回復できるという観点から、人工臓器と言っても過言ではありません¹⁾。（文献1）金谷 貢：医療材料の開発史。医学史事典（日本医学史学会編）。620-621，丸善出版，2022。）

このように人工臓器といえる歯の修復物や義歯は、各種歯科材料を加工・成型し、かつ頬や舌を噛まないように一定範囲内の大きさで、強さも確

保しつつ製作しなければなりません。そのため、歯科医師には歯科材料と材料力学に関する知識が必要不可欠であり、「歯科理工学」という医学部にはない理工学関連の教育・研究分野が歯学部には設置されていると考えられます。

ところで、私は高校生の頃、「なぜ医学部と別に歯学部があるのだろうか」と疑問に思っていました。その疑問を周りの先生方に聞いても、腑に落ちる回答にはずっと出会えていませんでした。しかし上記のように、「歯科疾患のかなりの部分を占める歯質欠損や歯の喪失に対して自己治癒力や投薬処置等で治すことはできないので、歯科治療の特殊性のために歯学部には歯科理工学という理工学関連分野が必要不可欠である。」それ故に「歯学部を医学部の中に組み込むことはそもそも無理なのだ。」と認識するに至り、自分なりに腑に落ちる回答を得た思いをしています。

・歯学部に勤めることになった少しユニークな経緯（自己紹介的に）

私の父は自宅で歯科技工所を開業していました。私が本学工学部の学生として専門教育を受けて1年ほど経った頃、帰省した際に父の仕事や技工室内の器材等を見ていて、工学部で勉強していることが歯科技工に役立ちそうな印象と、非常に強い興味も持ちました。爾来、工学部卒業後の進路として、歯科技工士学校で学んでから歯科器材のメーカーに就職するか、または実家に戻って父と歯科技工をするのも、人と違う道を進むことになって面白いのではないかと考えるようになりました。

工学部4年生になったときには、当時あった本学部附属歯科技工士学校を受験することに決めていました。工学部では研究室と企業の結びつきが強く、研究室の推薦で受けた就職先は確実に決定していました。いい就職先もたくさんありましたから、卒業研究を指導していただいた先生方からは就職への翻意を強く促されました。しかし既に腹は決まっていた。

本学部附属歯科技工士学校に無事入学し、2年の修業年限を終え、卒業式を迎えることができましたが、じつは卒業式の当日まで、実家に戻って父と歯科技工をやる算段をしていました。

ところが、歯科技工士学校卒業式後の祝賀会（1985年3月）において、1補綴の初代教授で、歯科技工士学校初代校長でもあった石岡 靖（きよし）先生から、「うちの歯科技工士学校は3年制の短期大学になって本学の医療技術短期大学部（医短、現在の医学部保健学科）に組み込まれる計画があります。それが2、3年のうちにも実現しそうだから、短大ができれば歯科理工学を担当する教官になりませんか。」と声をかけていただきました。また、「（就職して）いったん外に出ると大学に戻るのはいへんだから、短大ができるまでは1補綴にきて、研究・教育をやりませんか。」と仰っていただき、1補綴にお世話になることになりました。それまで就職先として決まっていたのが実家でしたから、すぐに連絡を取り、就職先を即日変更できたことも幸運でした。

しかしながら、それから2、3年後だったと思いますが、歯科技工士学校の3年制短大化は白紙に戻りました。石岡先生の記述によれば、「歯学部は昭和57（1982）年2月に「短大昇格準備委員会」を設置し、医療短期大学部は昭和60（1985）年2月に「歯科技工学科設立準備委員会」を、更にこれを受けて歯学部は昭和60年3月には「医療短大歯科技工学科検討委員会」等を設立して概算要求書の内容の整備を検討してきました。しかし、実現直前に歯科関連国会議員の反対運動で消滅させられた無念さは忘れません。」²⁾とのこと。石岡先生から直接聞いた話を合わせると「歯科技工士学校の3年制短大化は「あとは予算がつくのを待つだけ」という実現直前段階までできていた」状況で消滅させられたことになります。（文献2）石岡 靖：歯科技工士学校と教官に捧げる惜別の辞。歯科技工士学校の歴史 閉校記念誌（新潟大学歯学部附属歯科技工士学校編）。4、プライムステーション、2005。）

そのため私はそのまま1補綴に在籍させてもらいました。研究面では工学部学生時代にきっかけをつかみ、1補綴で既に取り組んでいた、窒化物

セラミックスを歯科鑄造に応用して補綴物表面の改良を図るテーマを引続き進め、また教育面では当時の全部床義歯学と部分床義歯学の実習を担当して（歯科技工士学校の実習内容もほぼ同じでしたので指導内容的にはあまり無理なく）、結局10年余りお世話になりました。その後は、当時の歯科理工学講座の初代教授・塩川延洋先生の定年に伴い、理工の先生方が順次昇任して一つ空いた助手の席に移動させてもらい、理工での30年余りが始まった次第です。この移動は理工の第二代教授の宮川修先生と1補綴第二代教授の河野正司先生にお計らいいただきました。

・歯科理工学の教育体制について感じていること
私は定年後、非常勤講師としてお手伝いしますので、次年度の理工関係の学部教育はこれまで同様、教授の泉健次先生との2人体制を何とか維持できます。しかし、理工が担当する教育の質と量のほか、評価の対象にもならないけれどやらなければならないたくさんの仕事を（とくに基礎系分野では）非常に少ない人員で負担しなければならないこと等からすると、正規教員2名の体制でもマンパワーが足りないとずっと感じていました。できれば、正規教員が常時3名はいてほしいところ。しかし今の情勢ではそれは無理そうなので、少なくとも正規教員を2名は確保した上で、それらの教員が定年になる3、4年前には3人目を補充して、教育内容だけでもしっかり伝えていける体制を構築していただけると現状よりも良くなるように思います。

このようなことは、本学の人事システムからすると大学上層部の先生方に伝わらないといけなこともかもしれませんが、あえてここに記しました。

最後に、新潟大学歯学部ならびに所属する教員、職員、院生および学生の皆様のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

ありがとうございました。

技工部だより

医療技術部歯科技工部門 長谷川 健 二

今年度より歯科技工部門長、歯科技工士長を仰せつかりました長谷川健二と申します。力不足ながらなんとか一年やってこれたかと思えます。ひとえに皆様の支えがあったことですので、この場をお借りして感謝申し上げます。

これまで何度か歯学部ニュースに投稿する機会があったのですが、自分のことに関してあまり触れずに来ましたので、少し自己紹介をしたいと思います。

出身は新潟県見附市で2001年に新潟大学歯学部付属歯科技工士学校を卒業後、新潟市内の歯科医院に勤務、2009年より本院にお世話になっておりますので、現在までほぼ新潟から出ずに生きてきました。現在は家族4人と、猫1匹とで暮らしております。主な趣味はゲームでドクエ、FO、モ〇ハン、マ〇クラ、etc.と、ジャンル問わず、その時の気分でいろいろなものに手を出す節操なしです。ただFO11にハマった時は本気で廃人寸前になってしまいました。まあ、今となっては良い思い出です（遠い目）。基本的にインドア派なので漫画やアニメなんかもよく観ますし、休日に

酒を飲みながら料理をするのが楽しみの一つです。

さて、私のことはこれくらいにして歯科技工部門についてですが、当院歯科技工部門は、現在6名のスタッフが在籍しており、その業務は一般技工やインプラント上部構造、医療安全に関わる口腔内装置など、多岐にわたります。

近年CAD/CAM関連機器の導入によるデジタルワークフローの恩恵により、作業の効率化、省力化を行うことができ、生産性を上げるとともに、より職人的感覚が必要な作業に注力できる環境になったと感じます。デジタル技術とアナログな手技を上手く使い、良い補綴物を作る、そういった技術が求められる時代なのかなと個人的には思います。

幸か不幸か少ないスタッフが故、全員オールラウンダーですので是非とも頼りにしていただけたいと思います。

今後とも歯科技工部門を何卒宜しくお願い申し上げます。

新潟歯学会報告

令和7年度 新潟歯学会第二回例会報告

令和7年度新潟歯学会集会幹事

予防歯科

竹原祥子

令和7年11月8日(土)に第二回例会を、歯学部講堂にて開催し、合計107名の会員の先生方にご参加頂きました。留学生による英語4演題を含む一般口演14演題の発表が行われました。テーマは基礎研究から臨床研究、疫学研究など幅広い領域に及び、専門外の内容を知る良い機会になったものと考えております。今回の第二回例会の特徴として、学位研究以外の発表がいくつか見受けられた点が挙げられます。本学大学院生の向学心と研究に対する積極的な姿勢がうかがえました。

一般演題の発表に続いて、丹原惇先生(歯科矯正学講座)による「歯科矯正学の現在地 一変わっていくものと変わらないもの」と題した教授就任講演が行われました。何かを極めるためにはまずは土台となる基本的な考え方および技術が必要となる一方、基本だけに固執して、新しい潮流を取り入れなければ、発見や進歩には至らないという点についてご説明があり、新技術をいかに適切に取り込むかが重要であることが示唆されま

した。さらに、歯科矯正分野が「不易流行」を理念に掲げていることが紹介され、どの分野にも共通する普遍的な内容として、深い示唆に富むご講演でした。

さて、当分野が新潟歯学会集会担当を拝命してからまもなく2年を迎えます。歴史ある新潟歯学会の名を損なうことがないように、運営に鋭意努めて参りました。新潟歯学会総会および例会において座長をご快諾くださった先生方に、改めて心より御礼を申し上げます。また、来年度より歯学会プログラムは電子化へ移行し、紙媒体でのプログラム配布は廃止となります。近年、多くの学術集会では環境負荷の軽減に加えて、情報更新の迅速化や閲覧時の利便性向上を目的として、プログラム電子化に移行しつつあります。本学会においても、このような時代的潮流を踏まえ、より効率的でアクセスしやすい情報提供体制を整備するため、電子プログラムへの移行を決定した次第です。



会場の様子



第二回例会 教授就任講演 丹原惇先生

来年度は第59回新潟歯学会総会を4月25日（土）、第一回例会を7月11日（土）、第二回例会を11月7日（土）に開催予定です。詳細は新潟歯

学会ホームページをご覧ください（<https://sksp.jp/nds/index.jsp>）。





同窓会だより

同窓会誌 全号が同窓会ホームページで閲覧可能になりました。

広報名簿部 部長 加藤 幸生
(歯学科29期生)

新潟大学歯学部同窓会では、毎年年度末に「同窓会誌」を発行し、学部・大学の動き、研究・教育に関する話題、同窓会活動の報告、同窓生の近況など、多岐にわたる情報をお届けしてきました。

昭和55年（1980年）5月の創刊号からスタートした本誌は、時代の変化に合わせてながら内容を充実させ、令和8年（2026年）2月には第46号を迎えることができました。これもひとえに、多くの同窓会員の皆様のご協力とご支援によるものです。

このたび、これまで発行された全号のバックナンバーをデジタル化し、「同窓会会員専用ページ」にて創刊号から最新号まで閲覧できるようにいたしました。

過去の寄稿記事や同窓会・学部の歩みを記録した貴重な資料が、いつでも参照できるかたちとなり、同窓会の歴史の確認や思い出の共有など、さまざまな場面で活用いただけるものと考えております。

誌面には、その時代を支えた先生方の言葉や卒業生の活動の軌跡が数多く残されており、歯学部の歴史的な流れを知るうえでも重要な記録となっています。

また、表紙デザインや誌面レイアウトの変遷からは、当時の学部の雰囲気や学生生活の空気を感じ取ることができ、創刊号から読み進めると、新潟大学歯学部が歩んできた年月がより鮮明に伝わってきます。

若い世代の皆様にも、ぜひ一度誌面をご覧ください。母校の歩みや同窓のつながりを感じていただければ幸いです。

今後も、誌面内容のさらなる充実と、より利用しやすい情報発信に努めてまいります。引き続き、新潟大学歯学部同窓会へのご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



歯学部を支える方々

歯学部での日々

歯学部総務係 南 愛 奈

令和7年10月に歯学部事務室へ参りました、総務係の南と申します。歯学部へ異動になる前は、財務部で大学全体の決算に係る業務に携わっておりました。現在は、歯学部の持つ予算の管理や大型物品等の契約手続き、施設整備の検討や施設管理等に係る業務を行っております。業務上、先生方には調査等のお願いやご相談をすることが多々ございますが、いつも素早くスムーズにご対応いただき、感謝の念に尽きません。

歯学部へ異動してきて最初に感じたのは、学生の皆さんが校舎に溢れていて、まさに「大学」だなあという印象でした。実を言うと、私は財務部にいる頃から学部の事務室への異動を希望してお

りました。というのも、財務部は五十嵐キャンパスの事務局棟の中にあり、周りにはほぼ事務職員しかいない環境です。大学全体の財務活動を把握する一方で、教育や研究の現場とはかけ離れている実感がありました。財務部の業務の中ではどうしても「数字の動き」として捉えてしまいがちな一つ一つの活動について、ここでは「血の通うもの」であることを感じながら携わることができ、非常に充実した気持ちです。

最後に、まだまだ至らぬ点が多々あるかと思いますが、まさしく「歯学部を支える方々」となれるよう、日々精進して参ります。今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



初めて学務系業務に触れて

歯学部学務係 齋藤 史人

令和7年10月に歯学部学務係に異動してまいりました齋藤と申します。

病院総務課総合臨床研修係と同課の総務係、財務部財務管理課管理係で勤務してまいりましたが、今回は初めての学務系の部署となります。

現在は時間割の作成や履修関係、共用試験等の学部教務関係業務や、学部入試関係業務、入試広報に関する業務などを主に担当しております。

歯学部に来るまで学務関係の業務に携わる機会がほとんど無く、初めて学務情報システムに触る際には、「間違っただけで履修に関する情報全部消したらどうしよう…」などとおっかなびっくり触っておりましたし、入試のリハーサルのような業務を行った際はタイトなスケジュールに驚きました。前にいた部署と業務のスピード感が全く違うため、何とか食らいつつある、といった感じです。

いまだに戸惑う事も多くありますが、それでも、事務室の方々や先生方のお力添えのおかげで少し

ずつ慣れてきております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。(また、すでに異動された、以前学務係にいらした事務職員の方々にも御礼申し上げます。毎日のように質問ラッシュを浴びせてしまい申し訳ありません…)

異動してから日が浅く、学生さんと関わる機会もまだ多くありませんが、遅くまで講義室で自習していたり、自主トレーニングのために実習室のカギを借りに来る学生の皆さんを見ていると、自分も頑張らなくては!と背筋が伸びる気持ちです。

歯学部生の皆さんが社会に貢献できる歯科医師・歯科衛生士・社会福祉士へと成長していくために、また、充実した学生生活を送れるよう、私自身も微力ながら支援できるよう精一杯努めてまいります。まだまだ至らぬ点等あるかと存じますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R7.8.31	岸 本 奈 月		包括歯科補綴学分野特任助教
退職	R7.10.22	中 島 努		小児歯科学分野助教
退職	R7.10.31	市 川 佳 弥		歯科矯正学分野助教
任期満了	R7.11.30	都 野 隆 博		高度口腔機能教育研究センター助教
昇任	R7.12.1	岸 本 直 隆	歯科麻酔学分野教授	歯科麻酔学分野准教授
採用	R7.12.1	小 野 重 弘	組織再建口腔外科学分野教授	広島大学病院講師
採用	R7.12.1	工 藤 武 久	歯科矯正学分野助教	医歯学総合病院医員

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	R7.8.1	佐々木 真 名	医歯学系歯学部事務室総務係派遣職員	
退職	R7.8.31	齋 藤 百 花		医歯学系歯学部事務室学務係
退職	R7.9.30	須 貝 恵		硬組織形態学分野事務補佐員
退職	R7.9.30	坂 上 亮		医歯学系歯学部事務室学務係主任
任期満了	R7.9.30	佐々木 真 名		医歯学系歯学部事務室総務係派遣職員
異動	R7.9.30	小 野 雅 紀	財務部財務企画課	医歯学系歯学部事務室総務係
採用	R7.10.1	石 川 公 子	医歯学系歯学部事務室学務係派遣職員	
異動	R7.10.1	南 愛 奈	医歯学系歯学部事務室総務係主任	財務部財務企画課主任
異動	R7.10.1	齋 藤 史 人	医歯学系歯学部事務室学務係主任	財務部財務管理課主任
任期満了	R7.10.31	石 川 公 子		医歯学系歯学部事務室学務係派遣職員
採用	R7.11.1	門 脇 彩 音	医歯学系歯学部事務室学務係	

編集後記

まず始めに、原稿執筆をご快諾いただきました先生ならびに学生の皆様、また編集にあたりご協力いただきました歯学部事務の皆様にご感謝申し上げます。この度、編集に初めて携わらせていただき、学生の頃から拝読してきた本誌が、多くの方のご協力の上で発行されることを改めて実感する良い機会となりました。今後も広く新潟大学歯学部の活動状況を発信できる場として、さらに普段かかわりのない先生や学生を知ることができる場として、歯学部ニュースが繁栄していくことをお祈り申し上げます。

小児歯科学分野 朴沢 美生

「歯学部生の活動」「留学生紹介」を担当いたしました。原稿執筆に快くご協力いただき、誠に有難うございました。学部・病院を築いてきた学生や先生方、ともに所属する皆様のご活躍、編み出される言葉から内なる熱量に触れる歯学部ニュースは以前より好きでしたし、原稿を担当したこともありましたが、今回編集に携われたことで「1冊の雑誌を作るために費やされる手間暇」「それが148号まで続いた価値」に気付かされました。そして皆とても素敵です。是非とも多くの方々の目に触れ、新潟大学歯学部の魅力が伝わることを願っております。

摂食嚥下リハビリテーション学分野 小貫 和佳奈

この度、初めて歯学部ニュースの編集委員を務めさせていただきました。ご多忙の中、原稿執筆にご協力頂きました皆様方に、心より御礼申し上げます。これまで読者として親しんできた本誌の編集に携われたことに加え、臨床実習指導医として関わってきた学生さんの声を、編集委員という立場で直接聞くことができ、大変感慨深く感じました。歯学部ニュースを通じて、本学歯学部の活発な教育・研究活動が、学内外に広く伝わることを期待しております。今後の発刊も楽しみにしております。

包括歯科補綴学分野 吉村 将悟

この度、歯学部ニュース148号の編集長を務めさせていただきました。かなり前に編集委員を務めたことがありましたが、久しぶりに歯学部ニュースに関わることができました。お忙しい中、執筆をお引き受けいただいた皆様にご感謝申し上げます。誠にありがとうございました。今後も歯学部ニュースの発刊が続く事を願っております。

組織再建口腔外科学分野 船山 昭典

歯学部ニュース

令和7年度第2号（通算148号）

発行日 令和8年3月17日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 船山 昭典、林 孝文
編集委員 朴沢 美生、小貫和佳奈
吉村 将悟
印刷所 (株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ：

撮影地：新潟市（万代島 光の航路1マイルVoyage2025）

撮影日：2025年10月

使用機材：OLYMPUS PEN-F/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影設定：絞り F4、シャッター速度 1/20秒（絞り優先AE、露出補正 -0.7ステップ）、ISO感度1600

裏表紙の撮影データ：

撮影地：新潟市（歯学部A棟より）

撮影日：2025年10月

使用機材：OLYMPUS PEN-F/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影設定：絞り F4、シャッター速度 1/2500秒（絞り優先AE、露出補正0ステップ）、ISO感度200

コメント：今回は「アーチの形」をテーマに、表紙と裏表紙のビジュアルを構成しました。

表紙には、「万代島 光の航路 1マイル Voyage 2025」（2025年9月19日～12月7日）より、朱鷺メッセを背景に信濃川沿いで展開される屋外イルミネーションを採用しました。標準レンズの広角端（12mm）を用い、手前にトンネル状、奥にドーム状の立体造形を配置し、光のアーチが視線を奥へと導く構図としています。時間を越えて進んでいくタイムトンネルのようなイメージを意識しました。LEDは刻々と虹色に変化しますが、本号では誌面との統一感を考慮し、青を基調としたカットを選びました。暗所での撮影のため絞りは開放としましたが、12mmという広い画角により被写界深度は十分に確保されています。それでも背景の朱鷺メッセはわずかにアウトフォーカスとなり、主題との距離感が生まれています。

裏表紙は、虹が現れた一瞬を捉えた写真です。秋の天気雨のような不安定な空模様の日、太陽を背にしたときにふと出会える光景です。もとは横位置で虹全体を収めた写真ですが、表紙のアーチと呼応させるため、縦構図にトリミングしました。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS E-5、OLYMPUS PEN-F、OM SYSTEM OM-5

レンズ：ZUIKO DIGITAL ED 50-200mm F2.8-3.5 SWD、M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO、M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 **(A)**

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。